広島大学文学部紀要

受贈
広島大学
47. 4. 14
附属図書館

特　輯　号　2

方言文末詞（文末助詞）の研究

藤　原　与　一

1972年2月

内　　容

○　はしがき……1
Ⅰ　文末詞（文末助詞）研究　総論……2
一　文表現の訴え……2
二　文末の訴え成分……11
三　文末詞の分類……25
四　文末詞の機能……30
五　「文末詞」化……39
六　文末詞の記述……44
Ⅱ　方言文末詞一覧……48
一　ナ行音文末詞類……49
二　ヤ行音文末詞類……55
三　サ行音ザ行音文末詞類……55
四　「カ」文末詞類……55
五　助詞系転成文末詞……55
六　助動詞系転成文末詞……56
七　動詞系転成文末詞……56
八　形容詞系転成文末詞……56
九　形容動詞系転成文末詞……57
十　名詞系転成文末詞……57
十一　代名詞系転成文末詞……57
十二　副詞系転成文末詞……57
十三　感動詞系（＝文系）転成文末詞……58
Ⅲ　文末訴え音について……59
文末訴え「ア」音……61
一　文末訴え「ア」音への私の気づき……61
二　……64

三　通常の文末詞のもとに随伴複合して
　　文末訴え「ア」のあらわれる場合……67
四　文末訴え「ア」音の分布……73
Ⅳ　主として文系（＝感動詞系）転成文末詞について……75
　　――呼びかけ心意　実証――
一　文系文末詞について……75
二　「モシ」「ナモシ」の類……76
三　「オイ」「コラ」「コレラ」「コロ」……76
四　相手を呼ぶ……78
五　感声的文末詞の複合……85
　　文末詞の分類体系……85
六　「ソラ」その他……86
○　むすび……91

方言文末詞(文末助詞)の研究

藤　原　与　一

○ はしがき

文末詞（文末助詞）は、真の方言研究の第一着眼点とされる。方言の現象に対して、音声現象・文法現象などと分析的な観察を施すよりも前に、早くも着目されるのが文末詞である。——人はだれしも、方言生活の中にはいると、ただちに、文末詞（文表現の文末の特定の訴え成分）に耳をうばわれるであろう。

文末詞研究は、方言理解の基本的方法とされる。

日本語の文法論的特質を考えようとすると、私は、この文末詞に到達する。およそ、言語においては、どの言語の場合にも、センテンスは、訴えの表現と見られるものであろう。センテンスの形式は訴えの形式と考えられる。センテンスはそのようなものであるために、センテンス形式においても、文末に、なんらかの特色が示されがちである。日本語は、文の表現構造が、述部を後置する文末決定の構造であるため、いよいよ以て、文末に、文の訴え構造の特色を示す。ここに、私どもは、日本語の表現構造上の一大特質を認める。

注　ガーディナーは、つぎの著作の中で、Speech の単位は文であると述べ、文表現・文末の抑揚について論じている。
Alan H. Gardiner : The Theory of Speech and Language 1951[2]
（要約紹介として、毛利可信訳述『SPEECH と LANGUAGE』がある。）

日本語の文末詞は、諸言語についての比較構造論からして、容易に把握しうる特質事項であるけれども、また、日本語そのものを熟視していても、しぜんに帰結しうるものである。一歩、方言の世界に立ち入れば、あたかも暗夜に人の顔を撫してただちに鼻の特徴点をとらえうるがごとくに、ただちに文末詞の

特徴点をとらえることができる。

文末詞の研究には、特定の内面的意義がある。文末詞の研究は、待遇表現法の研究としても、一定の意義を有すると考えられるのである。ことによっては、待遇表現法——口語での——研究では、文末詞（この訴え成分）が、第一の問題点になると言えるかもしれない。

方言文末詞（文末助詞）が独自のものであるのに相応して、そこに、方言文末詞（文末助詞）研究の独自性がありうる。

I　文末詞（文末助詞）研究　総論

（さきに私が「文末助詞」と呼んでいたものを、今日では、改めて「文末詞」と称している。）

一　文表現の訴え

A　「訴え」は、表現者にとって本然のことと見られる。方言会話の世界を見ると、方言人たちは、たがいに文（センテンス）を表現して会話し、その文を以て、何かをつねに相手に訴えている。はたらきかける訴え、反応する訴え、会話者はみな訴えている。老若男女、これに変わりはない。

カール・ビューラーは、言語記号の、対象と受者と送者とに対する機能的関係を、叙述（Darstellung）、呼びかけ（Appell）、表出（Ausdruck）としている。（『国語学辞典』による。）ビューラーの分析法そのものは今、論外としても、ここに、言語の表現がなんらかの訴えであることは、認められているとしてよかろう。アペルの機能をとり立てているところに注意したい。

言語にとってだいじなのは、呼びかけのことばではないか。これは、私の知友の植物学者が、南米のチリーでスペイン語を習いかつ使用して、その痛切な経験から述べたことばでもある。彼の経験では、呼びかけのことばがなければコミュニケーションは始まらないというありさまだったという。「もしもし。」に当たることばは「オイガー。」で、これはていねいな呼びかけになるものだ

そうである。子どもや犬に対する呼びかけでは、「オーラー。」と言うのだそうである。これらの呼びかけことばを、彼はふんだんにつかったらしい。ことばにとってだいじなのは訴えであることが、彼には実感されたのである。

幼児の言語習得の状況を見ていても、また、ことばのはじめは訴えであることが、よく理解される。私の身辺の二才児が、独りごとを何かぶつぶつと言っているので、何を言っているのかと耳をかたむけた。が、内容は聞きとれなかった。というよりも、それは、ことばになっていないことば、ことばめいたことばにすぎなかったのである。しかし、その女児は、ぶつぶつ言っては、そのおわりへ、「ネ。ネ。」というのをつけた。彼女は、「ネ」で、たしかに一きりをつけていたのである。ここに、本能的な訴えのはたらきが見えはしないか。おとなから聞きとった「ネ」であろう。ほかならぬ文末詞の「ネ」を、反応的にもせよ習得しているのが、ことばのとらえかたとしてすでにおもしろい問題である。その「ネ」を、独りごとにもせよ、訴えるような口調で言っていたことが注目に価する。「訴える」とまでは言いかねるとしたら、しめくくりことば同然に、「ネ」をつかっていたのが、注目に価する。訴えるということは、まことに、人間言語の本源に係ることなのであろう。

A′ 「訴え」に関しては、心情的なものをだけ、訴えの内容として考えるむきがある。私は、そのような意味で「訴え」ということを考えようとはしていない。訴えるのは、話し手の表現全体を聞き手に訴えるのである。知的なものと情的なものとの渾融体を、全的に相手に訴えるのである。

B　訴えは呼びかけとも言ってよいと思う。

文表現での訴え、または呼びかけは、文表現の冒頭でその徴証を示すのでもよく、文中でその徴証を示すのでもよく、文末でその徴証を示すのでもよい。表現者の表現意識、表現意図、訴え心のおもむくところ、文表現のどこへでも、訴えの徴証は示しうるわけである。一般にはこう言える。通常、文表現が出現すれば、そのどこかには、必然的に、訴えのしるしが現成すると言うことができる。

実際上、文末に来る訴え要素と、文頭に立つ訴え要素と、文中の訴え要素と

は、あい関連するものであり、おおかた、起原・成立を同じくするものである。たとえば「モシ」というのがある。これが、

○モシ、アナタワ　ドコカラ　オイデマシタ。　　<相手に問いかけることば>

のようにつかわれ、

○アナタワ　ドコカラ　オイデマシタ　モシ。

のようにもつかわれ、また、

○アナタワ　モシ　ドコカラ　オイデマシタ。

のようにもつかわれる。文頭に立ちうるものは文末にも立ちうる。これが訴えことばの面目であり、訴えるということの本質である。

もし、文中、二つ以上の訴え要素が出る場合は、言うまでもないことながら、それらは、機能上、じつにきれいに連関する。

C　日本語の対話の文表現では、文末部に訴え要素の出てくるのが大特色である。文末が、まったく代表的な訴え箇所となる。文表現上、文末重点ということが言える。

方言に生きる人々も、文末の重点にはしばしば気づいている。千葉県房総半島南部の一地に滞在した時のことであった。小学校五年生の男児が、一ことばごとにそれを「サ」でむすんで、「サ」という文末訴え要素を頻用した。これを聞くかたわらの母おやが、"「サーサー」ばかり言って"と笑い、かつ"ここのことばは、「サーサー」って言うんですよ。"と述べた。「方言ことば」はつまり文末ことば、ととられていることが多い。

旧来、たとえば教師が生徒に、"語尾を明りょうに！"と言ってきた。こういう時の語尾は、たいてい文末のことである。文末の重要性は、こうして、早くから人々に認められている。

一般に、だれしも、文表現の下方へ下方へと注意を向けていよう。かんたんな一特殊事実で、このことを考えてみる。九州地方の方言では、「何々ヲバ」を「何々バ」と言っている。「〜〜バ」と言って、目的格を表示し得ているのである。（聞く方も、「バ」に目的格を感じとっているのである。）かんじ

んの「を」格表示のことばを落としていても、人は「〜〜〜バ」で、「を」格を表示し得ている。現実に、こう、‘連語’の下接者の方がとり用いられる（重んぜられる）結果になっている。下接者重点主義とも言えよう。これと同じように、人々は、文表現全体上でも、最後的な下接者に、しぜんに注目しているようである。

D　日本語生活での表現者たちは、日々の表現生活で、しぜんのうちに、文末の特定の訴え要素を欲求している。表現のどんな場合にも、センテンスごとに、その欲求をおこしている。そのため、時に無自覚的にも、特定の文末要素を創作する。

上げ調子のアクセントを用いるのなども、文末の訴え要素の自然の創作として、注目されるべきものであろう。東北地方の宮城県下などでは、晩のあいさつに、

○オバンデ　ガスー。

お晩です。（今晩は。）

と言う。「スー」のところで、上がり調子を見せている。このさい、特別の訴えことばとてはないけれども、文末の上げ調子が、顕著な訴え要素になっているのである。人間の訴えたさが、こういう文アクセント後起をひきおこしている。

私どもは、文末の特定要素にすがっていく、文表現の生活を営んでいるのだとも考えることができる。こういう点では、文表現法が文末表現法になるとも言うことができる。

かえりみると、文章作品を見ても、個々の段落の末尾には、その段落をしめくくる何かが認められがちである。文章作品の最後部を見ても、そこまでの全体をしめくくる何かが認められがちである。また、特定の詩的表現の一センテンス完結体などを見ても、そこには特定の訴え要素があり、あるいはそこに、無韻の韻とも言うべき内面的な訴えが沈められている。文章表現上の、こうした事実との対応関係において、国語の文表現の文末の特定の要素を見ていけばおもしろいと思う。

E　話し手、表現者は、表現内容をひきまとめると（一文表現がおわろうとすると）、その表現内容の確認を求めるかのように、文末で、特別の念おしを企て、そこに、さまざまの文末特定要素を産む。

文末での訴え、なぜ、日本語では、このことが特質的なのか。これは、前にもふれたように、日本語の文表現の構造論的特質によることである。日本語の文表現では、表現構造が、述部の後方展開となっている。助動詞は動詞の後にあらわれ、しかも助動詞は累加される。このような助動詞は、山田孝雄博士によって複語尾と名づけられた。まさにその名のとおり、動詞的な叙述は下方に展開される。とどのつまり、表現そのものの決定されるのは文末においてである。これを私は、日本語表現法の文末決定性と言ってきた。さて、この文末決定の瞬間において、たとえば「オバンデ　ガスー。」での「スー」のように、特定の文末声調が生起する。また、文末特定成分、

○ワカリマシタ　ネー。

の「ネー」のようなものが膠着する。（「ネー」にまた上げ調子の文末声調が伴なっている。）このような膠着、きわめて単純な膠着が最後に可能であるがゆえに、文末重点の訴え法が、日本語では大いに発達したと見ることができよう。つまり、日本語表現法の文末決定性を支える文法構造は、文末での特定訴え要素の自由な生成と活動とを大いに可能ならしめたので、文末での訴え法式は、いよいよさかんになったと見られる。文末訴え要素の生成と活動とは、日本語の文表現法の機能的必然であると解される。

このことは、現代英語の文構造と比較してみる時、いっそう明らかに理解される。英語では、「It is very fine to-day, isn't it ?」（きょうはいい天気ですネ。）と言う。動詞 is は文初近くにあるので、わが文末尾の「ネ」に当たる言いかたは、「isn't it」と、つけそえなくてはならない。そのさい、「isn't it」の前には、「，」を打たなくてはならない。（日本文では、「きょうはいい天気ですネ。」の「ネ」の前に「、」を置くことは普通でない。「、」をそこへ置いてはならないのである。）「，」を置いてのみ「isn't it」と言うことが可能な英語の場合は、「isn't it」を、じつは第二のセンテンスとして付加するようなものである。そのようなのと、単純に「ネ」を付着膠着させるのと、なんと大きな

ちがいであることか。日本語では、文構造上、文末要素のこのような付着が可能なのである。助動詞は、一定の活用形によって、一定の承接約束のもとに、前方の動詞または助動詞に接着する。みずからはたとえ不変化助動詞であろうとも、前者への接続には、一定の接着のきまりがあって、前後関係は特定的である。だのに文末の「ネ」などの特定要素が付着する場合は、前者とのつながりに何の約束もない、ただの膠着である。接着に対する膠着であって、膠着の直前には一つの境めがある。日本語の文構造では、このように、文末特定要素の最後的な自在膠着が可能であるがゆえに、ここに、文末特定成分の繁栄を見ることができるようになった。

卑近な事例をついでにあげる。英語国民は、日本に在留して日本語に耳をかたむけはじめると、やがて文末の“現異な”「ネ」の類に注目する。これが、いかにも、英語の文表現の習慣にはないものだからである。彼らは、自国語との比較のもとで、この異様な分子をすぐにとらえる。しかも、彼らが日本を旅行してみると、東京での「ネー」は大阪で「ナー」となっており、広島では「ノー」となっている。ますますおもしろいというわけである。英語と日本語との構造上の大きなちがいを、彼らはここで、端的に受けとることができるのである。

英語のに似た語序を持つ中国語に生きる人も、日本語の「ネ」の類には耳をそばだてるようである。かつて、シナからの留学生諸君に接して、私はそのことを見聞きした。また、一度、私どもがシナ旅行をした時には、私どもの日本語での会話をじっと聞いていたむこうの初老の男子が、私どもの会話のおわったところで、「ネ。ネ。」と模倣するのに出くわした。(——この時、私も、日本語の「ネ」文末要素がいかにも特異なものであることを、痛感させられたしだいである。)

さきにもふれた幼児の「……ネ。」の場合にしても、また一般に幼児がなにげなく「ネ。ネ。」とおとなに向かって言ったりするのにしても、これをおとなのことばの模倣といえばそれまでであるけれども、ほかならぬ文末要素「ネ」を模倣しているところが、ことやかましく言えば、日本語の構造論的特質にかかわる事態とされる。「ネ」が、日本語の構造的特質にさおさす、あま

りにも特徴的なものなので、幼児にすらも、さっそくにこれがとらえられるのであろう。

文末特定要素「ネ」の類は、日本語に特有のものであり、日本語の文法構造ゆえの特質的なものとされるが、現代英語にも、これにやや類したものが、出現しなくはないらしい。そのことを、ここにつけ加えておかなくてはならない。草島時介氏の『なんでも試そう』(オリオン社昭和39年)には、その27頁に、アイルランド人の「マン」(mun)のことが書いてある。

> 青年が言うには、アイルランドでは、これ(藤原注「is it not?」)が平気で通っているのだという。(藤原注「You are going there, is it not?」)
>
> さらに彼らの会話の中で、「マン」という語が、話の終りにつくことを知った。特に、目を丸くして、何かを述べ、その後に軽く「マン」という。おかしなことを言うもんだと、これもきいて見た。
>
> 「そのマンという尻上りの言葉は何です」青年たちは、きもちが幾分感動した時に、話の後へ、軽くつけるのだと言っていた。例えば、I've only just arrived, mun!(僕は、たった今、来た所なんだよ)といった具合に使うんだそうだ。きっと純粋のロンドナーなら、
>
> Oh, I've only just arrived.
>
> というところで、アイルランド人はこう言うのだろう。

このようだと、文末の「マン」(mun)は、日本語での文末特定要素に該当しょうか。アイルランド人がつかう英語なので、特別のこともおこり得ているかもしれない。それにしても、「mun」などという、一種の感声的なものを文末に付加するのは、わが文末での訴え法とよく似ている。"きもちが幾分感動した時に、話の後へ、軽くつけるのだと言っていた。"とすれば、「mun」は、いよいよ以て文末詞的である。文構造は、上の例文に見られるように明らかに日本語のとはちがうのに、文末特定要素の生成ということで、このように、日本語でのと似たようなことがあり得ているのは一つのふしぎである。あるいは、草島氏が「, mun」と表記していられるごとくに、「mun」はやや独立的に発言されるのだろうか。そうだとすれば、これは「is it not?」相当の地位に立つものということになる。「, 」のいらない発言状態の「mun」がおこなわれると

すれば、これは、日本語のがわから言っても、まことに注目に価するものである。

つぎに、ハワイ英語の例をあげよう。神鳥武彦氏の現地でとらえられた事例に、

You just arrired, da tonari country, yah!

You go Haore movie tonight, yah?

などのことばづかい、文表現がある。(昭和42年10月、広島大学国語国文学会での、氏の講演発表、「ハワイの日本語生活」による。) このような「, yah」の言いかたは、どんな事情で生じたものか、私にはわからないが、ともかく、英文の言いかたとして、上記のようなものが成り立っていることは事実にちがいないから、これをこのまま受けとると、ここにも、文末特定要素かのような、しかも感声的な「yah」が認められることになる。この「yah」は、さきのアイルランド人の英文での「mun」以上に感声的なものかもしれない。それにしても、ここにも「, 」のまえおきがあるので、やはり、「yah」が徹底的に日本語の「ネ」などと同じものであるとは見られないであろう。

しかしながら、教科書英語のそとには、存外、日本語の文末特定要素にいくらか通うものもあるらしいことが、以上によってうかがわれる。文構造上の相違はともかく、文を表現して、最後に訴えの気もちをつよく表示しようとする心理は、彼我共通なのであろう。

ドイツ語の会話の世界にも、日本語の「ネ」のようなものが、単発的にではあるけれども、発言されるのを、私はかって興味ぶかく聞いた。やはり、センテンスの構造にはかかわりなく、訴えことばは、諸言語で、いろいろに創作されているのか。六年まえにマールブルクに宿った時のことである。下宿の主婦、60才台の人は、私どもに何かを話しかけては、「ネー。」と言うのであった。それはたしかに、私どもへの話しかけ・呼びかけであった。もちろんこの老女は日本語をすこしも知らないのだ。だが、それでいて、日本語流の「ネ」を発言していたのである。ただし、「きょうは寒いネ。」式に、「ネ」をすぐ前につづけることはたえてなかった。ものを一きり言っては、一呼吸いれて、「ネー。」と言うのがつねだったのである。そうではあっても、「ネー。」と前文との連関

の必然性が顕著だったので、あたかも、「ネ。」が前文をひき包むものとされているかのように思われたのである。つまり、「ネー」の文末要素的なおもむきがくみとられもしたのである。

スペイン語でも、"「ネ(ne)」を最後によくつかう。" と、さきに記した私の知友の植物学者は言う。"「ネ」は念おしのことばである。単語を並べて、最後に「ネ」を言えば、センテンスとしてのひきしめが利く。" と彼は言う。まるで日本語についての説明のようである。これからしても、日本語とは語族を異にするスペイン語などにおいても、なにがしかの訴えことばはあることが了解される。ただそれが、どの程度に文末成分的であるかが問題である。

シナ語の場合、

○吃飯了麼。

ごはんをたべましたか。

などの「麼」は、明らかに文末の成分である。——文末詞と言うことができる。それにしても、シナ語では、文末詞ふうのものが多彩にできているようではない。この点、日本語の場合とは大いにちがう。やはり、日本語とシナ語との語序のちがいが、ここに大きく作用しているのであろう。——日本語の豊富多彩な文末詞は、日本語特有の文構造のもとでのものと思われる。

朝鮮語は日本語と、語序をほとんど等しくするのか。であっても、文末詞ふうのものは、現代朝鮮語では、「カ」などがあるのにすぎないかのように、かつて私は本国人から教わった。関本至教授のご教示によると、なおいくらかのものが見られはする。が、多くはないらしい。朝鮮語にくらべても、日本語での文末詞の繁栄は、特異なこととしうるようである。

インドシナ語はどのような語序の言語なのであろうか。それはともかく、かつて旅行者談の新聞に出たのには、

上げ調子と下げ調子とは日本語の場合と同じである。上げ調子で問いかけになる。

「カ」「ヤ」「ラ」の文末特定要素(藤原言う)がある。

「カ」は日本語の「カ」に同じである。

「ヤ」は日本語の「ネ」に当たる。

「ラ」は、「それならそれでいいですヨ。」の「ヨ」に当たる。

などとあった。

以上、諸言語の場合を見てきた。これを要するに、日本語での文末訴え法は、まったく特質的なものであると言える。構造を異にする言語の中にも、文末訴え法に近い様相のものがあったりして、ことにドイツ語での「ネー。」など、わが「ネ」と似よりの音声を発して、訴えの言語心理の一般性を思わせたりもしているけれども、純粋の文末訴え法となると、これはぬきんでて日本語のものであることが明らかなのである。

かつてドイツ語学者とこの点について話しあうことがあった。その人は、"日本語の文法上の特色として、この点を強調して欲しい。"と言われた。国立国語研究所報告8の『談話語の実態』(昭和30年3月)によると、私どもの日常談話文では、じつにその73%に、文末特定要素と言うべきものをつかっているという。幼児も、いち早くこれをまねて、法外にまでこれをつかっているありさまである。——私の幼孫も、ひとりごとを言うのに、

○ヒ下リ　ハク　ノ。ヒ下リ　ネ。

ひとりで履くの。ひとりね。

と言っていた。第二文はほとんど「ひとりで。」というのに近いものだったが、ことばはしぜんに「ヒ下リ　ネ。」となっていたのである。この下げ調子には特に注意していただきたい。

F　日本語での、文末での訴え法——そこでの特定訴え要素の生成・流行は、日本語本来の欲求によるものである。日本語自体の表現欲求によることである。

二　文末の訴え成分

A　文末の訴え要素を、文(文表現)の成分としてとりあげる。

訴え要素を、文表現上の直接要素と見た時、これは、文表現の一成分としてとりあげられる。訴え法ごとに、文末の訴え成分がある。

山本正秀氏に「文末辞法」ということばがある。(東京大学『国語研究室』

五号<昭和41年11月>の「近代口語文の文末辞法の展開史論」による。)「である」「であります」「です」「でございます」などを文末辞法としてとりあげていられる。今、私は、このような文末辞法とは区別して、文末の訴え成分をとりあげようとする。言いかえれば、文末辞法の先に、文末の訴え成分を認めようとするのである。

B　文末の訴え成分の諸相を見る。

一つには、文末の声調がある。さきにあげた「オバンデ　ガスー。」の「スー」に見られるようなものである。これは上げ調子、上がり調子である。このほかの調子であってもよい。

単純な文末の声調は、いわゆる文末辞法の先に結晶している成分と見るのには、やや困難な点のあるものである。しかし、文末辞法の形成のあとに、文末の声調は、抑揚面として張りめぐらされるものなので、けっきょく、文末の声調もまた、文末辞法の先のものと解することができる。

文末の調子の上げ下げは、その場その場の任意の表現で、これは追求しても無意味である、とするむきがあろうか。私は無意味ではないと思う。方言の世界には、上げ下げの方言的習慣のきわだたしいことがすくなくない。この習慣の追求は有意義である。東北弁での、

○……　ネハ。

……ねえ。

というのなど、これは、「ネハ」と、かならず下げ調子になる。下げるのが習慣である。近畿弁でも、

○モー　アカン。

もうだめだ。

と、「アカン」は、高い平調でおわるのがつねで、「アカン」などとはならない。そうした方言習慣に、方言の情調が宿る。

文末の声調にパターンを見ることは可能であり、このような観察をゆるす文末の声調が、文末の一つの訴え成分として重視される。文末の声調は、文表現の全相をよくしめくくるものと見られるのである。

文末の声調の役わりは大きい。もっとも、文表現の待遇価を定めるという点では、文末の声調そのものは、他の文末特定成分ほどに有力ではない。待遇価の明細を示す力が比較的よわいとされるかと思う。しかし、文の表現を、なんらかのはっきりとしたものにまとめる力は、これにじゅうぶん認めらる。

上例の「ネハ」は、形態上、なかんずく明らかな文末訴え成分とされる。この種のものは、品詞論上、文末詞と見られるものである。上例では、この特定の訴え成分に、なお、文末訴え成分、文末の声調がかぶさっている。英語やフランス語などでは、日本語での文末詞のようなものがない。それらの言語では、文末の声調が、文末の訴え成分として、大きな役わりを演じているであろう。そういう場合だと、文末の声調の抑揚ぶりは、比較的単純なのではないか。文末詞を備えている日本語では、その文末詞のところで、文末声調の抑揚を、大きく波だたせることができる。

さて、文末の訴え成分として、三つには、文末の訴え音がある。出雲地方で、たとえば、

○カミ〔i〕ー　アゲマシ〔i〕タ　カイネァ。

紙をあげましたかねえ。　＜中年の女性が、中年の男性に問う。＞

と言う。「ネー」と訴える時に、発音が「ネァ」となる。つまり、「ネ」の〔e〕または〔ɛ〕の音に、小さな〔a〕をつけて〔nɛa〕などと発言するのである。本来は「ネ」ことばをつかっているのであるけれども、じっさいの発音は、装飾音〔a〕を伴なった言いかたになっている。出雲弁では、このような発言法が一般のつよい習慣になっている。ここに見られる〔a〕のようなものを、私は文末訴え音と言う。方言の中に習慣的なこの種の文末音が認められる時に、私はこれを一個の文末訴え成分と見ている。

文末訴え音は、微妙な音形として把捉されるもので、通常の文末詞の、語形と見られて独立的であるのにくらべれば、半独立的なものである。けれども、これはこれなりに一定の訴えの効果を発揮するものなので、方言研究の精細をたっとぶ立場から、私はこれをたいせつにとりあつかう。

能登弁では、

○ハヨ　イクマーシー。

早くお行きなさいよ。

と、女性がなよやかに言う。「マーシー」は「～ マッシャイ」の転と思われるが、このさいの「マーシー」の言いかたでは、「シャイ」を「シー」にしたところに、特定の訴え効果が認められる。ことに、「シー」と、そこに上がり調子の文末の声調も加わっているので、「シー」は一見、文末詞ふうのものにすらなっているのである。このような場合の「シャイ」＞「シー」にも、文末訴え音の創製があると見られないことはない。「ネ」「ナ」などの場合でも、現実には「ネー」「ナー」と、長呼してこれらを用いることがよくおこなわれるが、長呼そのことも、文末での訴え法と見られる。訴え音としての長呼形式も認めることができよう。

音による、訴えの心理の表現は、種々の場合に見られる。東京語などでの、

○イラッシャイマシ。

の言いかた、「マセ」を「マシ」としているところにも、〔e〕＞〔i〕の転化で、相手への当たりのやわらかさ、つまり訴えのよさ・おだやかさをはかろうとしているおもむきがうかがわれる。

さて、三つに、文末の訴え成分として、特定の形成物がある。まえまえから、文末詞という特称を用いて指摘してきたものがこれである。日本語では、文末の訴え成分として、特に、さきに語形と言った形成物が産み出されている。

この形成物は、ただの音形ではなくて、カナ文字で容易に表記できるものである。言主の意識に、文末での訴えの気もちがはっきりとしてくると、ただの音形にはとどまらない、はっきりとした形のものがそこにうち出される。たとえば、「ワシワ　シラン　ゾー。」の「ゾー」のように。

このような形成物には、その起原・材質はともかく、短形のものもあれば長形のものもある。

文末の訴え成分によって、文の表現を相手に投げかけ訴えかけるのを訴え法と言えば、特定の形成物を以てする訴え法こそは、訴え法の本格的なものと言える。この種の訴え法によって、微妙複雑な訴えかたが種々に表現される。

C　特定の訴え成分、文末詞と呼ばれるべき形成物について考えてみる。

不分明な文末訴え成分、文末訴え音のようなものから、分明な文末訴え成分へと、ものをたどってくると、人はだれしも、特定の形成物、文末詞の類の、語態・形態のおもしろさに想到するであろう。そして、方言の生活に注意する人なら、この種のものに目を見はらないではいないはずである。

人は、この特異なものを見すごすことができないし、これの独特のはたらきを、過少評価することができない。

東京都下を旅すると、たとえば若者たちが、「アノ　ヨー。何々して　ヨー。」と、しきりに「ヨー」の言いかたをかさねかけているのを、だれしも聞くことができるであろう。よくもあのように、一つの「ヨー」を連続的につかえたものである。と同時に思うことであるが、かれらから急に「ヨー」をとりのぞいたら、かれらの言語表現の生活はいったいどうなるであろう。まことに、だいじそのものの「ヨー」である。——人々の言語生活を可能ならしめている「ヨー」、その人たちの言語表現の生活のきめ手となっている「ヨー」である。この若者たちのことばの研究となったら、いやおうなしに、まず「ヨー」の追求におもむかなくてはならないであろう。方言研究は、一般に、まず、文末成分、特定の文末詞の研究におもむいて当然である。

文末詞の特別の重要性を、なお卑近な事実に徴して考えてみよう。地方人たちは、たとえばとなり島のことばをさして、“あそこでは「ノー」「ノー」と言う。”“「ノーノー」ことばをつかう。”などと言う。その地の方言生活の全体を、端的に、文末詞で描きとっているのである。方言人の素朴な観察に、まず、はいってくるものが文末詞だとみえる。文末詞がいかに代表的なものであるかが知られよう。

つぎに、一つの特殊な場合によって、文末詞の特別な重要性を見たい。ことばに不幸な人、聾唖の子どもたちの作文では、普通の人のようには、「会話文」が書けていないという。——みな、地の文なみに、「です」「ます」どまりになってしまっているそうである。それは、残念ながら、みずみずしい会話生活をしていないからであろう。それゆえまた、生き生きとした会話のセンテンスを文末詞でむすんで相手に訴えることをしていないからであろう。不幸な人たち

の現実の会話文表現のことを聞くにつけても、私どもは、会話のキー・ポイントとなる文末詞の特別のだいじさを思わないではいられない。

聾唖の人たちに、どのようにして、会話上の文末詞を会得させるか。これはまた、私には、むずかしい問題である。

同時に、文末詞が、独立性のつよい成分であることも、ここでよくわかるのである。

文末詞は、文の末の詞である。これが出てくることはすなわち文の終止を意味する。だから、さきの東京語などの「アノ　ヨー。何々して　ヨー。」などの場合も、私は、「ヨー」のところで「。」印をつける。

○アノ　ヨー、何々して　ヨー。

○きのう　サ、どこどこに　行って　サ、　……。

などのようにはしない。呼びかけことばの特定のものが出るたびに、文の表現はしめくくられると見る。

D　文末の特定の訴え成分、——品詞論上では文末詞と呼ばれるべきものについて、「文末詞」の呼称が適当であることにふれよう。

すでに述べた、地方人の弁別からしても、また、英語のセンテンス表現の場合との比較からしても、文末の訴え成分、特定の形成物、「ネ」などが、独立性のつよいものであることは明らかである。遊離性がつよいと言ってもよい。「ワカリマシタ　カ。」など、「カ」がいかに遊離独立的であることか。「ワカリマシタ」と人が言うのを聞くうちは、先方自身のことかと思っていると、おわりにその人が「カ」と言う。とたんにことばの全体がこちら（聞き手）にかかってくる。そうだったのか、こちらへの問いだったのかといったぐあいである。そのような、表現転換のようなものさえも感ぜしめる文末の「カ」、これはまったく独立性のつよい要素である。

文の成分——直接的要素——を分別する時は、「ワカリマシタカ。」であると、まずこれを、「ワカリマシタ」と「カ」とに分別しなくてはならない。「マイニチアツイコトデスネ。」であれば、これをまず、「マイニチ　アツイ　コトデス」と「ネ」とに分別しなくてはならない。文の分析、——文表現の次元での

分析で、最初にとり分けられるのが「カ」「ネ」のようなものである。この文末特定の形成物は、文末の助詞と見るべきではなく、文末詞と見ることが適切である。

はじめ、私は、これを文末助詞と呼んだ。その理由については、旧著『日本語方言文法の研究』に述べたところにゆずって、ここでは再説しない。もともと、山田孝雄先生の終助詞・間投助詞のお説に依拠し、そこを出発点として、文末助詞という総合名を立てるにいたった。

> 今は、終助詞・間投助詞を合わせて終助詞と言うことが、かなりおこなわれていようか。この場合、私としては、「終」の助詞と見ることに難をおぼえる。だいじなのは、「終わる」「終わり」ということよりも「文の末」ということだからである。—（「終」に「文末」のにおいはいくらかあるけれども。）「文の末」に位置する特定の機能者を、「文末何々」という名称でとらえることにしたい。

いったい、多くの助詞を見て、これらを、文中助詞と文末助詞とに、最初、大きく区別しなかったのは手ぬかりだった。文中のものと文末のものとでは、そのはたらき・性格が、いちじるしくちがう。（文中のものにも、間投助詞と言われがちの間投詞があるが、これは別格であって、性格上、文末詞に近いものとされる。）このちがいを見ていき、文末のものの存立状態を吟味していけば、やがてこれを独立詞としてとらえることになる。

文末詞、旧名によれば文末助詞を、孤立助詞としてとらえられたのは安田喜代門氏である。（『国語法概説』中興館、昭和3年）私はかつて、この名に共感を禁じ得なかった。が、考えてみると、どこに対して孤立するのかが、この名では明らかでない。孤立のしかたが示されなくてはならないのだった。「文末孤立助詞」とでも言われればよかったのである。文末に孤立する助詞は、すなわち文末詞と言ってよいものであろう。孤立の事実、様相を解釈すれば、もはや私どもは、助詞概念の中にとどまってはいられないのである。

文末詞とすべき事由を、つぎに、かんたんな事例からとらえてみる。東京語などでは、かねて、

○ハヤク　オシナサイッ　テバ。

○ハヤク、シロッ　タラ。

などの「テバ」「タラ」が、“終助詞”とか“感動助詞”とかとされていよう。

文法教科書類も、これらをそうあつかっている。「テバ」「タラ」は、もともと「と言えば」「と言ったら」である。起原に即応するかぎり、「テバ」「タラ」は、表現内容の多い、複雑な言いかたであることがわかる。そういうものが、今や転じて、文末で特定の機能者になっている。この特定物は、助詞と呼ぶとするなら、いったいどんな助詞か。

○ダッテ　シラナインデス　モノ。

の「モノ」、

○マー　オミゴトデス　コト。

の「コト」などにしても、これらの様相と独特のはたらきを見るかぎり、終助詞とは言いかねる。

○アツイ　ナモシ。　<伊予弁>

暑いですねえ。

などの「ナモシ」を見ても、これには、助詞以上のものがすぐに看取されよう。

徳島県下南部で、かつて、学校の教師の、「ナモシ」は敬語だと言うのを聞いた。その人がこう言ったのは、語意識上、「ナモシ」を独立の一語としてとらえていたからであろう。「ナモシ」は、「敬意」内容を有する独立の一単体である。

文末にはたらく特定の形成物の諸相を見ていく時、これらのためには、よくその地位と性能とを被うにたる総括名、包括力の大きい名称がつけられなくてはならないことがわかるのである。

注　動詞の命令形「オキー」に対応する「オキヨ」「オキロ」の言いかたの、「ヨ」「ロ」は、今の「文末詞」の論定のさい、別あつかいとすべきものであることを、ここに注しておく。「オキロ」は、これ全体で一命令形としてあつかう。同様にして、「オキヨ」も命令形とする。転じては、「オキルナ」の類も、このままを、禁止形という一活用形と見る。

時枝誠記博士は、接続詞を辞とせられる。そうして、

接続詞と云はれるものは、形式上、それだけで独立して詞を伴はない。これは一見、辞としての原則に反してゐるやうに見えるのであるが、それは形式的にさうなのであって、意味的に見るならば、接続詞も、必ず、それに先行する思想の表現を予想しなければ成立しないことは明かである。

（『日本文法　口語篇』岩波書店、昭和25年）

と言われる。形式的には、接続詞という辞が独立すると見ていられる。このように、独立する辞という考えかたをとるなら、文末詞もまた文末辞、文末助詞としてもよかろう。しかし、「独立する辞」という考えかたは、私には、穏当でないと思われる。私見によれば、接続詞は、上に対する受動的な地位に立つとともに、下に対する能動の地位に立つ。（――文表現が、その冒頭の接続詞によって導かれる。）このような大きいはたらきの接続詞は、辞的性格よりもむしろ文的性格を有すると考えられるのである。接続詞でなくて、「ショーチイタシマシタ。」というようなセンテンスではじまる、

○ショーチイタシマシタ。ヒトツ　ヤッテミマショー。

のような言いかたの場合、この「ショーチイタシマシタ。」も、明らかに“先行する思想の表現”を受けているが、これを辞とするには、ものがあまりにも明白な独立文である。この文に代えて、「ジャー」（では）などという接続詞を置いて、

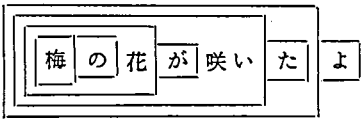
○ジャー、ヒトツ　ヤッテ　ミマショー。

と言ってみたい。接続詞の詞性と文的性格とは明らかだと考えるのである。一文内の構造を説明するのに、その文の外のものを基盤にとって、それに依拠する説明を立てるのは正当であるまい。センテンスという形態を認めた以上は、センテンス構造は、その内部分子の相関として説明せられなくてはならない。接続詞が、“形式的に”、独立していると見られるなら、そのことが、じつはだいじである。形式上の独立が明瞭なら、もはやそのものは、詞と――単語論上では――されてよい。けっきょく、独立する辞は、独立する詞とされる。それゆえ、独立する文末助詞は、文末詞とされるのである。

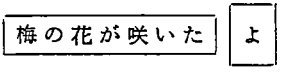
文末詞は、文末に独立する独立詞である。文末にあって、これは、前者からの活用関係などは絶して、孤立的地位に立つ。文末の訴え成分、文末詞を、何活用形を受けるなどと分類することは無意義だと私は考えるのである。この点で、一つ、問題になるのは、文語の「バヤ」などである。「バヤ」は感動助詞としてとりあつかわれており、しかもこれは、未然形を受けるものとされている。つまり、活用上の制約下にあるものとして、「バヤ」は受けとられている

のである。文語感動助詞とされるものの、この種のとりあつかいについては、改めて論究しなくてはならない。「……あらめヤモ。」の「ヤモ」などについてもである。それらは別のこととして、今、一つの所見を申し述べるとすると、活用上の制限を受けているものなら、それを、ただちには文末詞（感動助詞）とはしないのがよいのだと思う。承接の約束がつよければ、助動詞の線でそのものを考えるのがよくはないか。すくなくとも、現代口語では、私はつぎのように考えたい。文末詞というもの（独立詞——この特異な孤立的機能者）を受けとる時は、それの前に位置する活用系列とは無関係にそのものが受けとられる時にだけ、そのものを文末詞として受けとるようにしたい、と。

文末詞の独立性を示すものとして、時枝博士の入子型の図式は、有意義である。博士によれば、「梅の花が咲いたよ。」は、つぎのように表示される。



「よ」はじつに、上の全体をしめくくる地位に立つことが、あざやかに表示されている。（私は従来、この最後的地位を、収約的頂点と称してきた。）時枝博士は、この「よ」を、辞の一種の助詞、“感動をあらわす助詞”としていられる。辞というあつかいにはなっているが、上図のごとくであるとすると、「よ」が独立的・孤立的であることは明確である。（形式上の独立のだいじさも、ここに明らかなのである。）私は、時枝博士の図式法をお借りして、つぎのような図示をしてみたい。



「梅の花が咲いた」をどう図示するかは、上の区分図示を実施しての後のことである。

時に人が、私の「文末詞」という考えかたに近いものを表明していられる。宮地裕氏の「文末助辞と質問の昇調」（国立国語研究所論集『ことばの研究』第1集）に、それを見る。また、亀井孝氏は、かつて私が「文末助詞」の名を以てことを説明していたら、その内容に賛成してくれるとともに、“あなたは便宜的に助辞と言ったけれど”と、むしろ私の考えかたをむちうってくれられた。

後藤蔵四郎氏著の『出雲方言考』に、「ね」や「ねい」を「感詞」としていられるのに、旧来、気づかないでいたのは遺憾であった。私は、この先覚の術語「感詞」に、深い賛意を表してやまない。「ネ」など、かな一文字で表記しうるものは、とかく助詞的に見すごされがちかもしれないけれど、「ネ」に「ワ」もよそえて考えてみていただきたい。「ワ」はもと「わたし」、その「ワ」にはすぐ「ナタ」(ナーあなた) などがならぶ。並列されるもののかずかずを見あつめ、おのおのの中味を考究する時、「ネ」「ワ」「ナタ」などは、特定の表現効果をかもす文末特定の機能者として、等しく重要視され、みなみな、独立詞と見られてくるのである。

つぎには、さきにもふれるところのあった間投成分との比較から、文末のが文末詞であることを認めることにしたい。旧来、間投助詞と言われているものがある。その指摘はややまちまちであるが、ここには、純粋に文中に間投されるもの、一文中の中間要素をそれと見ることにしたい。たとえば、安芸方言下の、

○コンナー　カー　イカン　ノカー。

　　おまえは、ええ、行かないのか？

の「カー」のようなものである。(もともと、「これ」か。) また、備前地方などの、

○キョーワ　ケー　オエン　トミーノー。

　　きょうは、ええと、どうもうまくいかないなあ。

の「ケー」のようなものである。(これも「これ」からきている。) 東京弁の、

○ダッテ　オマイ　ダメナンダ　モノ。

の「オマイ」も間投成分になっている。代名詞が、種々に間投成分になっているのが注目される。それはともかく、一文中に、まさに間投されるものがあることは、明らかな事実である。これらを、旧来、間投助詞と呼んできた。はたして助詞であろうか。現に、上例の「オマイ」などは、とり出してみれば、いまだなまなましい代名詞でもある。

「オマイ」にせよ、「ケー」「カー」(このような、形の変じた、助詞らしいもの) にせよ、現に、文中では、遊離独立 (分立) している。前後にかかわりが

ない。まさに間投されて文中に浮かぶ成分である。品詞論上、助詞とは言いかねる。間投詞と言うべきものだと思う。これと等しく、文末のも、文末詞と見られるのである。

語――品詞――の次元において見る時は、上の「オマイ」は、体言、代名詞として受けとるべきである。「カー」や「ケー」は、文字どおりの間投詞として受けとられる。これらはもはや、間投詞としてしか受けとりようのないものになっている。(「これ」から離れたものになりきっていて。)

文表現上では、種々の語が、間投成分にもなりうる。文表現上の間投成分＝間投部(間投話部)と、語としての間投詞とは、つねに明確に区別しなくてはならない。

間投成分は、文中、遊離の地位に立ちつつ、そのセンテンス表現に、独特の色あいをつける。――そういう作用、文表現全体にかかわっていく作用を持つ。(「間投」の地位にあり、前後に無縁の地位に立つがゆえに、そのように、全相へかかわっていくのであろう。)たとえば前の安芸弁の場合でも、「カー」が、この一文全体を、おどけた気分の、気がるな、上品でない表現にしている。こうした全的効果とも言えるものが、文末詞の場合には、もっと明瞭である。間投成分について、その全的効果ゆえに、はっきりと、間投詞の独立性が認められるとしたら、文末成分の場合は、もっとかんたんに、文末詞の独立性が認められてよいと思うのである。

一般化して言えば、文末詞と間投詞とは、類同のものであり、文中、相関の地位に立つ。両者は組みあってはたらいて、文の表現の質を微妙に決定する。ではあるが、なお両者に差異もあり、だいたい、文末詞の方が、文表現上、より包括的な役わりを演じている。文末詞の独立性はいよいよ明瞭とされよう。'表現されることがらに対する話し手の立場の表現'であるものを、独立の要素と認めることは適切である。

文末詞に関しては、また、接続詞の場合とも等しく、その文的性格を言うことができるのではないかと思っている。

○ヌクイ　ノマイ。　<肥前弁>

ぬくいね。

○ンダ　ナッス〔ü〕。　<東北弁>

そうですね。

のような例を見ていると、「ノマイ」や「ナッス」に、くさぐさの思いのこめられているのがわかる。このような思いの表現は、文的表現とも言えそうである。(「ノマイ」や「ナッス」は、縮約されたセンテンスのようなものではないか。) 文末詞は、文の現実で、文的性格のものになっていると解されるのである。ここまでくると、英語文で、

○It is very fine to-day, isn't it ?

の「isn't it ?」が、まずは「ネ」と和訳されることに、改めて興味をおぼえる。「isn't it ?」はまさに文的であるが、それに比照される「ネ」も文的とされる。文的性格を認めようとする方向は、ものを助詞と考えようとするのとは反対の方向である。

最後に、亀井孝氏の「強さのアクセント」の説をお借りして、文末成分(品詞上、文末詞と呼びたいもの)の独立性を見、このものには、文末助詞の名よりも文末詞の名の方が適当であることを明らかにしよう。亀井氏は、『概説文語文法』(吉川弘文館、昭和30年)で、

> 一個の文には、そのなかに、さらに小さいいくつかの切れ目がある。一個の文を、切れるだけ多く、**強さのアクセント**にもとづく統一によって切っていってみると、文は、その前後に息の切れ目をもついく組かの断片に分かれる。
>
> 見れば　いと　小(チイ)さき　家(イエ)なり。(堤中納言)
>
> みぎは、
>
> [みれば] [いと] [ちひさき] [いへなり]
>
> ……
>
> ……
>
> などのように、アクセントの統一をもつ四つの断片に分けられる。

と説いていられる。そうして、

> 力点(藤原注「強さのアクセントの力点」)は、一つの断片においては、ただ一個にかぎる。……。黙読においても、黙読のリズムとして、かようなアクセントは存在する。それによって、黙読においても、例文がみぎのような断片に分けられることは同じである。このような断片を**文節**という。

と言われる。方言での文表現、

○アツイ　ノー。

暑いね。

○ワカッタ　カー。

わかったか？

などについて見ると、「ノー」にたしかに強さのアクセントの力点がある。「カー」にもある。したがって、「ノー」や「カー」は、強さのアクセントの統一を持った断片と認められる。その断片は、すなわち文節である。

このような断片、——アクセントの統一を持つ断片、文表現の「表現そのもの」の次元でくぎりとりうる断片は、私見によれば、スピーチのパートである。話部である。上例の「ノー」や「カー」は、いずれも一個の話部として、文の現実から、その'切れ目'にしたがって切りわけられる。単独の話部となっている「ノー」や「カー」は、辞ではなくて詞であるとしなくてはならない。(——詞と辞との別は、話部論で決着のつけられるものであろう。)いま一つ、実例をあげる。北関東、栃木県下で、たとえば、

○デンポー　タテテ　オキマスカラ　ネ。

電報を打っておきますからね。

と言う。これの文アクセントはごく平板に流れており、最後に、きわ立たしいアクセント隆起がきている。(この種のことは、栃木・茨城の二県に多く、いわば、これ式の言いかたが、当地方の文アクセントのパターン<特質傾向>になっている。)このような「ネ」を見る時、私どもは、ここに、異常なまでの'強さのアクセントにもとづく統一'体をとらえざるを得ない。「ネ」はまったく、遊離独立の成分と受けとらざるを得ないのである。このような成分を形成する品詞を、私どもは、文末詞と呼んで然るべきである。

E　文末の訴え成分、品詞としての文末詞は、文表現上、その末端に膠着する。

膠着自在というようなものであるがゆえに、このところには、おびただしい転成文末詞が自在に成立し得ているのであろう。文の表現をすると、表現者は、

その表現を相手に的確に、またはつよく訴えようとして、種々に語りかける。その語りかけのことば——文表現的なもの——が成形化されて、種々の新生（——転成）文末詞となる。語りかけは自在無限なので、それに応じて、種々の文末詞が多彩に形成されていくのであろう。

文末詞に転成文末詞の多くできていることからも、私どもは、文末の訴え作用の自在性と、訴えるためにその機能者を産みだす自在さと、それらの文末詞を膠着させる自在さとを知ることができる。

三　文末詞の分類

A　分類法考究のために、文末詞にはどのようなものがあり得ているかを概観する。

一つには、根っからの文末詞と思われるものがある。「ナー」「ヤー」など。

二つには、かんたんな音変化によってできたものがある。「ナー」に対する「ナイ」、「ゾ」に対する「ゾン」など。「～ます」が「ますィ」となって、この「ィ」がやがて文末詞化してもいる。「カイ」が相互同化をおこして「ケー」となり、「ケー」「ケ」という文末詞が成立している。（おもしろいことに、播磨の地方では、一般には〔ai〕>〔ε:〕〔e:〕の音変化をおこさないが、文末詞「ケー」「ケ」はよくつかわれている。）徳島県下などでは、「デヨ」から「ジョ」という文末詞をおこしている。

三つには、他品詞から転成<転生>してきた文末詞がある。がれがじつは多い。例をあげると、呼びかけ用の特定詞「モシ」が文末詞に転成している。

○サイナラ　モシ。　　<瀬戸内海、伊予弁>

　　さようなら。

というようにつかわれている。「モシ」に「ナ」などが冠せられているのは周知のことであろう。（「ナモシ」となったものは、また、さらに音変化をもおこして、「ナンシ」「ナッシ」などとなっている。）「モシ」に省略がおこって、「モ」という文末詞、「シ」という文末詞ができている。——他品詞からの文末詞転成には、なお、その後の諸変化による文末詞生成が伴なう。さて、転成文末詞の特例を一つあげよう。（これには、後の変化による新文末詞はおこって

いない。）私の郷里（瀬戸内海大三島北部）方言では、

○アシコイ　イキャー　エット　アル　ヤラ。

あそこへ行けば<何々が>たくさんあるだろうじゃないの？

○ダレモ　オリャー　セン　ヤラ。

だれもいはしないわね？

のような言いかたをし、「ヤラ」という文末のことばをつかう。これをつかって、人にやわらかく問いかける。女性的な言いかたである。おもに女性がこの言いかたをし、男の子もまた、時にこの言いかたをする。子どもがこの言いかたをした時は、あどけなく聞こえる。方言のこの「ヤラ」は、起源はともかく、今、特定の文末詞になっている。「ヤラ」の用法に限りがあるけれども、これが、文表現上、古語意識なしに特殊の遊離成分として用いられていることはたしかなのである。

四つには、陰在の文末詞がある。たとえば「あとからクラー。」が「あとから　クル　ワイ。」の約だとすれば、ここには、「ワイ」文末詞が陰在していることになる。

五つには、前にも述べた文末訴え音の類がある。ただしこれは、すでにその名にも明らかなように、文末詞とするには難があるので、本来、文末詞概観の外に置くべきである。ただ、特類文末詞などとしてこの類のものをとり立てる時は、これも問題内の事実とされる。

六つには、多くの新複合形の文末詞がある。「ナモシ」も「ナ」と「モシ」との複合したものであった。文末訴え音も文末詞と複合する。「モシァ」など。（「ア」が訴え音である。）根っからの文末詞と考えられるものと、転成の文末詞とされるものとの複合が多く、そこにさまざまの新複合形が産みだされている。大分県下の「タナチコ」という文末詞は、「タナ」が「アナタ・ナー」で「チコ」が「ということ」、これなどは、転成文末詞としてもよい「タナ」と、転成文末詞「チコ」との新複合形である。

以上に見るとおりに、文末詞は群生している。これら総体を対象として、分類法を考えることになる。

B　文末詞の分類は、言ってみれば、日本語という主体がこの国土上で種々に文末詞の生態を見せている、そのありさまを、体系化して受けとることである。諸種の分類法が考えられるが、けっきょく、それらは、たての分類法とよこの分類法とに二分される。——この二つの方向をどう調和させるかが問題である。

純粋によこの分類法をとろうとすれば、これは共時論的立場と言える。このさい、意味機能に注目して、いわば内容から分類していく方法が一つ考えられる。訴えの度あいとか、訴えの方向（もっぱら対他的とか、やや自己主張的とか）とか、訴えの中味とかが、分類の規準になる。かんたんな分類例としては、

- 問いの文末詞
- 答えの文末詞

というようなものをあげることもできよう。

私は、内容からの分類をすっきりとしたものにすることはむずかしいだろうと考えている。すっきりとした、各項の対応関係のきれいなものにしようとすると、いきおい大ぐくりの分類になる。大ぐくりであるのは、そのままでは有効でない。いきおい、下位区分を求める。ことは煩雑になるのである。

私は、形式上の分類の方を重んじる。このさい、共時論的立場と通時論的立場との融合を目ざした見地をとることが実際的だと考えるのである。

はじめに、全文末詞を、つぎの二類とする。

- 原生的文末詞
- 転成（転生）文末詞

「原生的」とは、今日もはやすぐには転成を考えることができない類のものを言う。「ナ」や「ヤ」「ヨ」の類である。（文末訴え音も原生的なものである。その微妙な訴え音が、拡大され定着されて、一定的な音相ともなれば、やがてそれは原生的文末詞とされよう。）しかし、どこまでが原生なのか、じつは判断がむずかしい。そういう点からも、原生的と言っておくことが必要である。

原生的文末詞をややゆるやかに広汎に認める。これを下位区分すれば、

- 感声的文末詞
- 非感声的文末詞

となる。問いなどにつかわれる「カ」を、感声的とも言いかねて区別し、便宜、非感声的文末詞とする。

感声的文末詞は、

ナ行音文末詞

ヤ行音文末詞

などと区分される。

サ行音文末詞

も、現段階では（共時論的には）、認めてよかろう。「ゾ」「ゼ」などがある。「サ」も、当今の現実の使用上では、まず感声的である。

転成の文末詞は、

- 助詞系のもの
- 助動詞系のもの
- 動詞系のもの
- 形容詞系のもの
- 形容動詞系のもの
- 名詞系のもの
- 代名詞系のもの
- 副詞系のもの
- 感動詞系（＝文系）のもの

などと下位区分される。

C　文末詞分類上、困難をきわめるのは、種々の複合形文末詞の処理である。「ナ」に「ヤ」の複合したもの「ナヤ」、このようなのは、感声的なもの同士の複合であるから、感声的文末詞としてよい。それにしても、これを「ナ」の所に属せしめるか「ヤ」の所に属せしめるか。つぎに「ナ」に「アンタ」の契合した「ナンタ」はどこへ分属させるか。「ナ」の所へ置くのには「…ンタ」のひびきが大きすぎる。これは代名詞系転成文末詞の条に収めるか。

複合形文末詞の処理法として、一つの原則を立てるなら、そのものを、複合形の末部本位にとりあつかうのを以てたてまえとすればよいと思う。「ソージャ

ナヤ。」の「ナヤ」は、「ヤ」の所に分属せしめる。「カヨー」は「ヨ」の条下におく。「ナヤ」など、「ナ」に強調があるけれども、訴えの効果は「ヤ」的であると見る。日本語の文法構造上の特性一般の指向するところにしたがい、複合形態については、下方要素の方がけっきょくは重要であると考えるのである。九州弁、阿蘇南麓のことば、

○アー　トーカ　ツネ。

ああ、遠いのですか。

の「ツネ」にはアクセントの高音がない。「ツ」も「ネ」もともに低い。こんな場合、単純に、「ネ」に重点があると見ることができる。

複合形文末詞に、文表現でのどのようなアクセントが認められようとも、原則としては、各複合形文末詞を、その末部形式本位に処理する。(——こう考えておいて、どうしてもわりきれないような場合に接したら、その複合形文末詞は、末部本位にとともに、頭部本位にもあつかう。)

一義的整理として、いちおう、以上のように考えた。(——「カイナー」のようなのにしても、「カイ」の呼びかけはさらに「ナー」とまとめられて、全体は、「ナー」本位のものになっていると考えられるのである。複合態の、あとにいくほど、呼びかけ性が盛りあげられている。あとほど重要である。)

複合形文末詞については、その認定と分類処理とを、なお今後もよく考究していかなくてはならない。

後注

1　複合形文末詞に、複合の緊密度の大小がありうる。たとえば「ノ・モシ」の「ノモシ」は、「カ・ナー」の「カナー」よりも、複合の緊密度が大である。このような「ノモシ」は、もはや一体化して、「カ」や「ナー」にも匹敵するものとなっている。四国弁・近畿弁での、「ソー　カナ。」(そうですか。そうなの。)などの「カナ」は、「カ」と「ナ」とのむすびつきのつよいものである。東京語などでは、「カナ」は、「……　カナ。」とつかわれることが普通で、この「カナ」の「カ」と「ナ」とは、ややよわくむすびついている。

2　どういう文末詞とどういう文末詞とが複合しやすいか。そういうことに、方処的差異はないか。

3　「複合上、上にしかこないもの、上にきがちなもの、下にしかこないもの、下にきがちなもの、上下のどちらにもくるもの」、といったような見わけかたを、複合形文末詞の吟味に適用してみたい。

D　文末詞分類の動的な体系を得て、文末詞の隆替・推移のありさまが見ていかれるようにしたい。

四　文末詞の機能

A　柳田国男先生は、かつて私に、

自分の思ったことを聞いてくれたかどうかをたしかめるのが、文末詞（藤原言う）のはたらきである。

とも、

自分のことばの印象をたしかめるために、相手の目を見る。その、相手の目を見ることばが文末詞（藤原言う）だ。

とも言われた。この時、先生は、主として単純な感声的文末詞を考えていられたようである。先生は、文末詞を、“ことばとエジャキュレーションとの境のもの”とされ、“ジェスチャーを持った”感声とされた。（この点では、私の別に考えている間投詞も、区別なしに、あわせ見ていられたようでもある。）

「ナ」「ネ」「ノ」などが、文末に位して言語によるコミュニケーションに、決定的なあずかりかたをしていることは、先生の卓抜なご説明によって、きわめて明らかであろう。文末詞の機能に関する簡潔な総論がここにある。

以下に各論を試みよう。

B　文末詞は、文の表現において、文末の特定の機能者となり、表現をきょくたんに特定化する。

書かれた文章のセンテンスは、受けとり手（対象）に対して、きわめて非限定的である。通常、特定の対象をねらってはいず、むしろ不特定の対象に発言しようとしている。——その不特定の対象は、目前に（近くに）いてよしいなくてよしであり、また、単数であっても複数であってもよい。書きことばのセ

ンテンスは、漠然とした対象を相手にしている。いわば非対話性の言語である。それゆえ、直接に相手に訴えかけようとすることばはそこに出てこないのがつねである。

それに対して、口ことばのセンテンスは、いつも目前に特定の相手を持つ。相手がたとえ二人以上であろうとも、それらの相手が、特定の対象とされているのである。対話の文法は、そういう規格のもとに成立している。対話のセンテンスは、まったく、対人的な、対話性に輝くセンテンスとして成立しているのである。そういう、対話のセンテンスの文末に、文末詞が輝く。

「……です。」「……ます。」のようなセンテンスだと、たとえ発言者が受けとり手をよく考えていても、その双方間の距離は、かなり大きいものとなる。ところで、「……です　ネ。」「……ます　ネ。」となると、彼我の距離は俄然、小になる。文末詞のはたらきは、このように、早くも特定の対象を求め、彼我の距離を一挙に小にするのである。このはたらきかけは、まことに卒直簡明なものである。

こういう、特定の対象を求める卒直さに注目して、私は、文末詞は表現をきょくたんに特定化すると言う。

さきに国立国語研究所の『談話語の実態』にふれるところがあった。談話語の73%に文末詞が出ることは、すなわち、談話語が早くも表現を特定化していくものであることを示している。

C　表現の特定化という表現法の中で、文末詞は、叙述構造を収約するはたらきを見せる。

文末詞の文表現上での機能（現場作用）は、文統轄の機能であるが、――その機能の特殊性格を言うのが前条であるが、この文統轄の機能を、表現の外形から見る時、文末詞には、その表現の叙述構造を収約するはたらきが顕著である。

文が「主←→述」の構造である時、文末詞は、その構造の外に立って、一文の収約頂点となる。

○キョーワ　アツイ　ノー。　　＜中国弁＞

きょうは暑いね。

という時、「ノー」は、「キョーワ　アツイ」の主述構造の外に立って、上全体をしめくくる。発言に、「キョーワ｜アツイノー。」というようなポーズのとりかたのものがあったとする。このような場合にも、「キョーワ」と「アツイ」とは正対するのであり、その、文法的に緊密な一つづきのもの（音声的には離れていても、その音相の底を縫って、意味のつながり関係を見せるのが文法である。）を承けて、「ノー」がはたらく。「ノー」は、要素として、「キョーワ」に直接する性質のものでもなければ「アツイ」に直接する性質のものでもない。

○アツイ　ノー。

というセンテンスの場合も、「ノー」は、陰在の主部に対応する述部としての「アツイ」、つまり「<主>←→アツイ」を承ける。

○キョーワ　ノー。

きょうはね。——まあほんとに、暑いことですわ。　<共感の表現>

というセンテンスの場合、すなわち主部だけを「ノー」が承けているかのようなセンテンスの場合も、「ノー」は、「キョーワ」にわけなく接合しているものではなく、「キョーワ←→述」のような気味あいのものに接している。じっさい、「キョーワ　ノー。」では、「ワ」のつぎに、微妙なポーズがある。（明確な時間的ポーズにならなければ心理的なポーズである。）そういうポーズの認められる「キョーワ」の表現は、主部相当形であってももはや「主←→述」的なもの、述部化傾向をおびたものとも受けとられるのである。

このようにして、要するに、文末詞の、文表現形態上での、叙述統一のはたらきが明白である。

さて、

○マー、オメズラシー　ワ。

○マー、オメズラシー　ネー。

○マー、オメズラシー　コト。

などと言う場合、文末詞の叙述構造収約の機能に、じっさいの、力の大小があろうか。文末での、文末詞孤立の程度に、じっさいの大小がないとは言えない。「コト」は「ネー」よりも孤立性が小かもしれない。もし、孤立性がより

大である時は、収約機能力も、見た目に、より顕著となってくる。

対話の通常文では、文の表現は、文末詞を最後的契機として成立する。文末詞は、文表現の‘主導権者’になる。文中の助詞の地位は、まったく局部的であるのにすぎない。たとえば、

○コレガ ……。

と言った場合、文中助詞「ガ」はただに「コレ」に付属し、文の一部分で辞としてはたらくばかりで、文表現の全体に大局的に「ガ」がかかわることなどはあり得ない。

○ソリャ ソーダケド、……。

の「ケド」にしても、「ソリャ ソーダ」を句として統轄し得ても、文の流れ全体を最後的に統轄することはできない。ところで、

○オレワ イヤダ ゾ。

などになると、「ゾ」は「オレワ イヤダ」の外に立っており、「ゾ」は“文につく”と言いあらわすことができる。「ゾ」を「ヨ」にかえてみてもよい。「ナー」にかえてみてもよい。文末詞一つのはからいで、すっかりちがった文表現ができる。文末詞の、独特の、叙述構造収約の機能が明らかであろう。

このような収約の機能を、しめくくりのはたらきと言ってもよい。そのしめくくりの時、文末詞が、そこまでの文表現のうねり・ゆれを、大きくゆり定める。（文末詞のところで、一ゆり大きくゆれ、そのゆれとともに、それまでの文の流れのゆれが静まる。）しめくくりは、「ゆり定め」である。文末詞ごとに、そのゆり定めかたがちがう。このようなゆり定めが、文表現を文表現として、文字どおり個別化していくのである。（これをパロール化と言ってみる。）

ものが文末に位置をしめるということは、けっして平凡なことではない。文末という地位は、まったく重要な地位である。

ここで、叙述・陳述の語にふれておきたい。文表現上での文末詞もまた叙述分子である。文表現は叙述体にほかならない。文表現の構造のうえに認められるものは、みな、叙述の分子と考えられる。文末詞の文表現上での役わりを、‘伝達の効果’をささえるにあるとする見かたがあったとしても、私は、その伝達の効果を産むことを、なお叙述だと考えていきたいのである。

陳述とは、文の叙述を最後的に相手になげかけていくことだとしたい。伝達の効果ということからすれば、その効果の産みかた、産みぐあいからが陳述だとしたい。「知らないよ。」との言いかたがあるとすれば、「よ」までの言いかたは、まず一連の叙述構造である。これを、表現の現場で、

○シラナイ　ヨ。

のように言い、また、

○シラナイ　ヨ。

のように言い、また、

○シラナイ　ヨー。

のように言う。(そのおのおのごとに、表現の効果がちがう。) こうした純粋のパロール化が、陳述である。文表現ごとに個別的である、それこそ一回的な表現の作用が陳述である。——文表現の現場化の現場化が陳述だとされる。

注　音声言語の場合は、陳述が音声化されるけれども、文字言語の場合は、陳述が、無表記のままで表明される。この場合、陳述を表記するためには、有形の叙述表記に、いわゆるゼロ符号をつけなくてはならない。

方言の口ことばでは、文が、文末の声調によって最後的に個別化されるが、その個別化の音声形ごとに、個々の陳述が認められる。

陳述は、叙述を見かえしたところに、文表現極致の作用として認められるものとも言ってよかろう。

文末詞は、叙述構造収約の叙述をする。その叙述の完了する瞬間、一文表現の陳述が実現する。

D　さきに述べた表現の特定化という表現法を、内面的に見る時は、文末詞の文表現上での機能として、文の待遇表現の流れを収約するはたらきが認められる。

対話のセンテンスは、その内実に注目すれば、待遇意識の展開単位と見られる。さきの特定化は、文が早くも待遇表現文になるということであった。文中の個々の部分は、みな待遇表現に関与している。かくして文末の部分——品詞上では文末詞とされるもの——が、文の待遇表現法の最後の頂点に立つ。文末

待遇表現法とも言うべきものがここにある。この特定の表現法が、文のそこまでの全待遇表現法を収約すると見られるのである。

待遇表現とは、待遇敬卑の表現である。特定化されるセンテンスの表現は、しょせん、待遇敬卑上の表現となる。文末の特定者は、おのずから、このことに深くかかわる。文末詞は文表現の末尾にあって、待遇敬卑の表現に決着をつける。

文末詞の文表現上の機能は、概観して訴えとも持ちかけとも言うことができよう。その訴え・持ちかけの中核をなすものが、待遇敬卑の効果だと考えられる。文末詞に、待遇機能があると言ってよい。

待遇機能とされるべきものゆえ、それはただの感情ではないことがすでに明らかであろう。

以下、実例について、待遇の機能を見ておく。

○ オ下ーサンモ　イッショニ　イラッシャルンデショー　ネー。　<若い相手に念をおす。>

「オ下ーサンモ」と言っている。しまいには、「ナ」「ネ」「ノ」の、どんなところにおちつくか。「イラッシャル」となったので、もはや「ノー」とはしにくくなった。「ナ」と「ネ」との微妙なちがいが反射的に考慮されて「ネー」が採られた。「ネ」の待遇機能の尊敬性がかえりみられている。けっきょく、上の文では、特定の待遇表現が「ネー」でほどよく収約されていると言える。

○コッツァ　キ[i]ヘ[e]　ジャ。

○コッツァ　キ[i]ヘ[e]　デァ。

これらは、北奥での、「こちらへ来なさい。」の二文である。むすびの「ジャ」である方が、よりよい言いかたの文表現なのだという。「キヘ」は「来なさい」に当たり、そこまでは二文同様であるが、最後の文末詞の出かたによって、表現が分かれる。つまり、両者は、待遇表現文として、甲乙二途のものになるのである。「ジャ」「デァ」おのおのは、それぞれの文末にあって、その文の待遇表現を、特定効果のものに収約する。そういえば、さきの「ネ」にしても、たとえば薩摩半島南部内その他では、これが最後にくると、その文はあしざまの待遇表現の文に収約される。——文末詞の待遇機能は、方言ごとに、こまかに

見ていかなくてはならないものである。

○ドコイ　イッキョン　ヤー。

○ドコイ　イッキョン　ナー。

○ドコイ　イッキョン　デー。

これらは、讃岐方言の中の例である。第一文は同輩以下または親しい相手への文、第二文はややよいもの、第三文は、第二文と似たりよったりでもあるが、時に、よりやわらかい、やさしい表現でもある。末尾の「ヤー」「ナー」「デー」にくるまでは三者同様であるが、いよいよ最後の文末詞表現になると、おのおのは、さっと色づけられ、おのおの、独自特定の待遇表現文になる。これほどに、文末詞の待遇機能、待遇表現法を収約する機能は大なのである。讃岐地方では、総じて、尊敬の気もちをあらわすための助動詞が少ない。が、こういう中で、有効な文末詞が、ほどよく発達している。文末待遇表現法の要素が適当に発達しているのである。このような事実は、全国の方々に多く認められる。よくしたものである。助動詞による尊敬表現法（――比較的複雑な形態となる）と、文末詞による文末待遇表現法（――文は比較的簡潔なものとなる）とは、こういう点でも、深い相関の関係にあるのである。

○ハヨ　イッキャイ　ヲー。

早くお行きなさいな。

これは薩摩半島からの一例である。「ヲー」がつくと、全体がぐんとよい言いかたになる。わずか「ヲー」だけのことであるけれども、これが無視できない。どころか、これは重要視されなくてはならないのである。はじめてこの地方に来た時、私は、この「ヲー」のふしぎな力が、よくはのみこめなかった。しかし、のちの度の踏査で、私が開聞岳の鳥居を指ざして、あのお宮は？とたずねた時、老翁が、

○ヒラキキジンシャ　ヲー。

ひらきき神社ですよ。

と答えてくれたので、すべては氷解した。文末特定要素の、文表現全局を左右する待遇機能は、このようなわかりやすい事例からして、容易に領得することができる。

私の年末の方言調査の旅は、文末詞のこういう機能を見ていく旅でもあった。見れば見るほど、文末詞の待遇表現収約力がよくわかってきたのである。

文末詞に複合形があり、たとえば中国山陽地方で、

○アッタ　ワイヤー。

　　あったよ。

など、「ワイヤー」と言う。九州東北部でも、

○ソー　カヤー。

　　そうかい。

など、「カヤー」と言う。このような時は、複合の後接分子「ヤー」の方に、より最後的な待遇機能があるとされる。すなわち、上二例は、いわば「ヤー」的な待遇品位の表現になっているのである。一般に、複合形文末詞のはたらきでは、それの後接の分子が、文待遇表現についての決定的な収約力を示すと言える。この種のことは、私とともに文末詞の研究につとめている多くの人たちも実証している。

文末詞の待遇機能に関しては、近来、諸家も多くこれを説くようになった。"終助詞による敬意の表し方"というような言いかたが、多くなされるようになっている。近畿地方の方言に関しては、西宮一民氏・村内英一氏・巌佐正三氏・井之口有一氏などの発表がある。また、楳垣実氏も、『和歌山方言』1（昭和29年10月）の「紀州ことば(1)」の中で、

　田舎での敬意の表わし方は、極めて控え目で、それだけ親愛の情のこまやかなものであり、都会のように助動詞などという大層な言葉を持ち出さなくとも、十分に助詞だけで間に合ったと考えられる。

と言っていられる。ついでながら、古典研究者のがわにも、たとえば、穐田定樹氏「源氏物語の文末助詞の待遇性」（『親和国文』第1号、昭和44年3月）などの発表がある。

九州では、早く、上村孝二氏が、

　総じて旧士族部落では割によく保存されているが平尾部落では敬語法が少い。終助詞などで辛うじて尊卑の区別がある。

と論じられた。（「鹿児島県下の表現語法覚書」『文科報告』第三号）東北で、

佐藤喜代治氏は、

終助詞は福島県下の方言の丁寧表現のうち、最も単純な、又基本的な文法形態を有し、実際の使用度数も多い。

と言っていられる。(「福島県方言の敬語法」『文化』第二十二巻第四号) 人々が、ただ、終助詞、助詞と述べていられるのは、以上のとおりである。瀬戸口俊治氏は、かつて、薩摩東南部の方言について、

当方言人は、その気持を文末部に表現していると思われる。本来なら述部に示される筈のいわゆる敬語が除かれて、その働きまで文末部にゆだねる形になっている。

と述べられた。(昭和35年1月)

言われている"終助詞"は、文表現の待遇価を収約して、ただちに対人関係を特定的にとりむすぶ。この待遇機能は、だれにも識得されやすいものである。'対人関係を構成する助詞・助動詞'というような考えのもとでは、文末詞は、ただちにとりあげられなくてはならないものである。

土地っ子、方言人自身も、文末詞の独特の待遇機能に気づいていることが多い。たとえば和歌山県下では、文末詞の「ノシ」を、"特によいことば"としている。

私どもが敬語法を問題にする時も、見かたを展開させて、文末詞の表現までを注意することが、今や必然的課題と言える。(私自身の研究過程も、いわゆる敬語法の研究から文末詞の研究へであった。) 文末詞は、待遇表現法上の重点としてとらえられなくてはならない。

このような文末詞に関しては、そのはたらきを、文末詞法と言うことも可能であろう。文末詞法は、文の現実では、待遇表現(敬卑表現)の文末法と言いかえられる。この文末法を正当にとらえて、方言待遇表現の世界を純粋に記述することにしたい。

私は、方言の純粋記述という考えからも、文末詞を重んじるようになった。一般には、記述上、文末詞への注意がまだよわい。なぜであろうか。概観するのに、記述はなお一般に単語論的である。文論におよんだとしても、それは単語論の次元においてである。語句をとらえても、単語の延長としてである。センテンス本位の記述は、いまだ発達していない。センテンスのなまのままをとらえることが発

達していないので、文の末の重要素——文末詞——をとらえることもよわいのだと思われる。現象をセンテンス本位でとらえることの堅固な実践が、よく、文末詞の認識と記述とを可能ならしめるであろう。

待遇表現の文末法に役だつ文末詞は、その機能価値に応じて、品等分けすることもできる。俗に言えば、文末詞の多くは、その品位によって、分類することができる。この分類は、文末詞の体系的記述のために重要である。一方、この分類は、文末詞の機能論的研究の一結論として位置づけられるものでもあろう。

品等を、上・中・下、敬・常・卑の三階に見分けることは比較的容易であろう。年層や性別を顧慮して、こまかな分類に到達することは、もはや結論のしごとの一つとされる。ともあれ、待遇品位に関する合理的な分類が要望される。

五 「文 末 詞」化

A　上述の機能、文末詞の機能は、日本語の「文」構造の最後部に立つ要素としての文末詞のになう機能である。

日本語の「文」では、最後部の要素は、みな、必然的に、それそうとうの収約的機能をになう。このため、文末にくる要素は、一般に、「文末詞」相当のものにもなっていきがちである。

英語の構文のようだと、文末部分の「文末詞」化などは、おこりようがないのではないか。日本語では、文構造上、「文末詞」化が自由におこりうる。

○オラ　シラネー　ダ。

などという言いかたがある。「ダ」はもともと、文末に付く成分であろう。(「ソリャ　ソーダ。」などのように。) そこで、上のように、「シラネー」にも下接する。——「知らない」ことを「ダ」と指し示す。このように言う習慣がつよまって、「オラ　シラネー　ダ。」式の言いかたが慣用のことばづかいになると、人は末尾の「ダ」を、いつとはなく特別のものとして受けとるようになり、このものを遊離の成分と感じるようになる。発言する時にも、ここへ特別の調子をつけたりする。(ここで力を入れたりする。) かくして「ダ」が、文末特定の成分となっていく。「ダ」が「文末詞」化する。

B　「文末詞」化すると、当のものは、多少とも感声味をおびるようになる。ものが多少とも感声化する。感声化の方向に立たなくては、ものは、文末詞として安定することができないのでもあろう。

C　文末詞は、実際上、文的性格を持つと、さきに言った。こういう性格に立つものゆえ、これの自由自在な造出も可能なのであろう。「文末詞」化のことも、ぞうさなくおこりうるのだと思われる。

D　対話文の、途中のくぎりめは、文末に、いくらか似たものである。じっさい、そういう話部末が文末にもなる。「オマエワー。」（おまえは！）といったぐあいにである。このようにはたらく話部の話部末にあるものが、しばしば「文末詞」化する。例を北九州弁に見よう。

○……コソは　……。

のような言いかたがある。「コソは」で一話部がまとまる。「コソは」のくぎりのところで、じっさいに、発言上の小休止がある。物理的時間の休止がない場合も、心理的にはたしかに休止が感知される。（――自身の発言の時はたしかに心で小休止を置く。人の発言を聞く時にはここに休止を感得する。）この、休止直前の話部末要素「コソは」が、文末詞相当のものとしてはたらくようになっている。

○アン　クサ。　　<北九州弁>

あのね。

など。「コソは」の「クサ」が、「あの」の「アン」に付いている。この「クサ」は、もはや「単純な文末詞」相当のはたらきをしていると見られる。

○バカ　ガー。バカタレ　ガー。

これは、肥前平戸口で聞いた、少年の発言である。少年が、より小さい男の子にむかって、「馬鹿が！」と叱っていた。ここの二文の「ガー」も、もはや文末詞相当のものとして、文末の特定機能を発揮していると見られる。

文中の話部末には、文末化の契機があり、そういう話部末は、みな、文末詞的なものを生成させようとしている。このことが特に興味ぶかく観察されるの

は、越前中心に聞かれるあの独特の抑揚においてである。越前弁では、たとえば、電話口で、

○ソレデー、アノオー、ウラアー、キノオー、ガッコーエー、イタラー、……。

それで、あの、わしは、きのう、学校へ行ったら、……。

のように言う。(——類似の傾向が、つづいて、若狭・丹後半島突端部にも見られる。)一きり(一話部)ごとに休止が大きく、各話部末は長呼される。「ソレデー」のように。長呼にアクセントの波がつくと、「アノオー」となり、「オー」というものができてしまう。こうなると、休止の効果も大きくなって、ここで文が成立するおもむきである。(「アノオー。」だけなら完全な呼びかけ文である。電話口で、土地っ子はよくこのセンテンスを出している。)話部末の文末化する様相が顕著であろう。このさい、「オー」は、文末詞相当のものにさえなっているのである。上例は、各話部ごとに、話部末で文終止のおもむきを見せて、話部末に、文末詞的なものを見せようとしている。話部の切れ目というものは、こうもなっていくものだと解される。

E 「文末詞」化には、いろいろの自由経路が予想される。が、現実に方言の全国状態から帰納しうる、おもな成立経路となると、助詞系以下、さきにかかげたいくつかのものがとり立てられる。

助詞系のものといえば、

○タチャン ト。 <薩摩弁>

お立ちなさいよ。

の「ト」のようなものがある。この「ト」を、伊予の南部だと、

○ワシャ シラン ト。

わたしは知らないよ。

のようにつかう。(方言での用法差は注目すべきことである。九州に広く用いられる「ト」は、他人にものを聞いたりする時などに用い、相手にはたらきかけて用いるようである。伊予の「ト」は、自分のことについて言う時に用いられるようである。方言ごとの、このような用法差は、「文末詞」化の、現地事

情の相違ということである。

つぎに、助動詞系の文末詞といえば、さきにあげた「ダ」がある。（P.39）これの山陰の例を見るなら、因幡方言下の例に、

○モ下リョーリマス　ダガ。

帰ってきてますのよ。

のようなのがある。つぎは「ゲナ」である。岡野信子氏の聞き得た、北九州弁の中の「ゲナ」例には、

○ミゴトラス　ゲナ。

みごとだそうですよ。

というのがある。（昭和46年7月のご教示による。）「ミゴトラス」の「ラス」は「ダス」かという。そのような、「です」的なもので言い収めたうえで、「ゲナ」と言っている。「ゲナ」は、文末詞のはたらき相当のはたらきを示すものになっているかと思う。

大橋勝男氏の調査によるのに、東京都下の新島では、

○ウンダ　ジャ。（“産んだ”）

○ヒャクショ　シテモ　ハタラキキレネー　ジャ。

などと言っている。また、八丈島八丈町大賀郷では、

○コガン　イキタロ　ジャ。

“こんなに生きてますじゃ。”

○ウッタ　ジャ。

“売りました。”

○ソーダ　ジャ。

“そうだよ。（「ジャ」は「よ」の意）”

などと言っている。――（上の“共通語訳は、土地の中年女子が訳してくださったもの”と、大橋氏は言われる。）この種の「ジャ」は、助動詞系の文末詞としうるものなのかどうなのか。

外形上、同種としうるものなら、東北津軽から伊豆諸島まで、これがたどられる。ちなみに、国学院大学の野村純一氏のご教示によれば、相模原市域内の二・三の老女たちが、関東人でありながら、返事に、

○ソージャー。

の言いかたをしているという。「ソージャケン」（そうだから）の言いかたもしているという。

さて、動詞系の文末詞といえば、山陰弁の、

○イカ　コイ。　　<「イカ」は「行かう」>

行こうよ。

の「コイ」（←「来い」）などがある。岡山県下の、

○キョーワ　ネー　トミー。

きょうはないよ。

などに見られる「トミー」は、「と思え」からきたもので、今は完全に「文末詞」化している。（同系の「トモイ」「トモインサイ」「トモイナハイ」などは、西半中国に分布している。）形が特定化してしまうと、機能も、はっきりと、文末詞のそれらしいものになる。

つぎに代名詞系の文末詞といえば、山口弁の、

○アッチ　イテ　カク　ソ。

あっちへ行って描くのよ。

○コッチ　オリテ　クル　ソ。

こっちへおりておいで。

というような「ソ」がある。「ソ」はもと「それ」で、この「ソ」が、「の」相当の準体助詞としてもよくつかわれる。「ジュークニ　ナッタンガ　オリマス。」（十九歳になったのがおります。）など。こういう用法が一方にあって、他方、「ソ」を文末につかう用法が慣熟しているのである。形も、「それ」からは大きな変化で、「ソ」は完全に「文末詞」化している。東京語などの、

○ヤメル　ノ。　　<制止>

などの「ノ」も文末詞ととられるものであるが、これはもともと助詞の「の」であろう。この「ノ」に等しいものとして、「ソ」ができている。

つぎに名詞系の文末詞といえば、「コト」や「モノ」がある。越前地方の、

○ソヤ　トコト。

そうだ。

などの「トコト」は、「コト」を含むものなのかどうなのか。

つぎに副詞系の文末詞といえば、「はや」からきた「ハー」などがある。東北の「ネハ」文末詞では、「ハ」が「ネ」といっしょになっているのが見られる。「ネハ」はこれで、渾然とした一体の文末詞である。

つぎに感動詞系（＝文系）の文末詞といえば、「ホラ」、その転の「ハラ」などがある。

○アユ　ミデ　ミャイ　ハラー。

あれを見てお見なさいな。

は、九州、薩摩半島南部の「ハラ」例である。「ソラ」（←「そら！」）が、「ソーローことば」に誤解されたりもしている。

F　他のものの「文末詞」化は、日本語での、特筆すべき大きな現象である。「文末詞」化は、限りもないほどであると言ってよい。

日本語は、本来、文末詞的なものをかぎりもなく設けていく欲求・性能を持っている。これによって、文末詞を多く産んでいる。が、それは、新生というよりも、大部分、転成である。

転成の事実の中に、いくたの形態省略がある。形態の省略によって、機能の大きな変動がひきおこされ、そこに、新文末詞が安定する。

日本語は、文末詞の転成あるいは新生を以て、不断に、文末詞体系の流動・発展を見せつつあると言ってよかろう。この流動・発展が、ひいては、現代日本語そのものの体系的発展にかかわっていくと思われる。

六　文末詞の記述

A　文末詞の記述には独創性が要求される。文末詞全般が、上述のような特質的なもの、日本語的なものだからである。

外国の言語理論を我に適用して文末詞を説くことは容易でない。外国の言語理論をここに投射して、わが文末詞の意義と活動とをみずから精叙することは、はなはだ有意義である。

さいわい、私どもは、ここに文末詞という特質分子を得て、言語に関する一

理論の創造を目ざすことができる。

B　文末詞研究は、主として文表現論の立場で遂行されるべきものであろう。単語論的処理としては、文末詞の分類などが問題になる。じっさいの、文末詞の活動をとらえる段になれば、しごとはつねに文表現論的たらざるを得ない。さきにもふれたが、旧来は、文表現論の不活発、現象を文表現（センテンス）本位にとらえることのよわさ・無さのため、文末詞への注意がよわかった。そこでは、文末詞の重要性は、徹底的には、わかりようがなかったしだいである。文表現に着眼し、その座で文末の特定要素——文末詞——をとらえる時、私どもは、じっさい、文末詞の重要性と、文末研究の重要性とを体験しうる。

こういうところから、逆に、文表現論の立場の重要性も、痛感されてくる。

C　言語の学問を大きく分けて、‘外的言語学’と‘内的言語学’とにするか。文末詞の研究も、外的にこれをおこなっていくことのできる領域が広い。と同時に、内的にこれをおこなっていくべき必要が、当然、大きいとしなくてはならない。文の末の特定詞は、文表現の心の結集するところだからである。

この、文表現の中核（本核）、表現心意昂揚の局所を、えぐりにえぐっていく内面的研究は、今後、いくえにも開拓されなくてはならないことである。

開拓は、かんたんな事例から出発してもよい。たとえば中国地方の幼児が、四国路から来た客の、「ナー」「ナー」を連発する話しことばを聞いて、いかにもふしぎそうな顔をする。客の帰ったあと、ほかならぬその文末詞を、幼児はしきりにつかってみる。問いにも、返事にも、しきりに「ナー」を言う。こういう事実は、まず、文末詞による私どもの生活の、広さ・奥深さを、つよく考えさせてくれよう。その広さについて、奥深さについて、ことを明らかにしていかなくてはならない。また、言語能力のよわい、おさない者が、人の会話に注意するとなると、けっきょく文末詞をとらえる事実を、私どもは、人の発言の様態の特色の端的な受けとりかたとして、正視していかなくてはならない。その正視から、特色の内面に分け入っていくべきである。

言語の内面をたずねていこうとすれば、いよいよ、要素論的な行きかたでは

たりないことが明らかになろう。つねに、要素の生きる全体像への注目が重要となる。こうして、内的言語学の記述では、つねに、最低最小単位として文表現体をとりあげていくことが、必須となってくるのである。

D　文末詞記述の大きな方向としては、二つの方向が区別されよう。一つは、一つの方言——という体系的存在について、そこに存するすべての文末詞を、総合的にとりあげていく方向である。いま一つの方向は、一々の文末詞事象ごとに、よこ広く、多方言の事実を見ていく記述方向である。これは、最大限にしごとをひろげれば、日本語の全方言状態——日本語方言共時態——を対象にとることになる。

前者のいきかたには、一方言の諸文末詞の活動の相互関係を活写しうる長所がある。一つの方言、伊予の今治市近在の一方言をとりあげたとするか。ここでは、文末詞は「ナ」を本位とする。「ノ」はあまり言わない。「ネ」もない。ところで古くから「ネヤ」を言う。「ネヤ」が、おもに男の人に用いられていて、これは、ややくだけた気もちをあらわす。ナ行音文末詞の範囲に限ってものを見ても、ここに、「ナ」と「ネヤ」とのふしぎなむすびつきがある。このむすびつきに着目すれば、「ナ」の用法も、「ネヤ」の用法も、まさに相関的に、精叙することができる。伊予の、内海の岩城島の一方言では、ナ行音文末詞で、通常「ノ」をつかい、「ナ」はつかわず、「ネ」もつかわない。しかるにここでも、また古くから「ネヤ」をつかう。この方言では、「ネヤ」が、老女などにもよくつかわれてきた。（若い女性のことばではなかったようである。）あまり品のよいことばではないようである。ともあれ、ここにもまた、「ノ」と「ネヤ」との、ふしぎなつれあい関係がある。これら両者の活動ぶり、その委曲・微妙微細は、二者を精細に見あわせてはじめて、えがきつくすことができるはずである。どこの方言にもせよ、諸種の文末詞は、その方言下で、——その特殊的事情のもとで、共存し共栄する。個々の文末詞の生存・活動の事実は、その共存共栄の中で、用心ぶかく見とらなくてはならないわけである。

後者の行きかた、よこに事象を見ひろげていく行きかたには、事象相互の関係を叙述しにくい難がある。が、当の事象の盛衰興亡のありさまは、この行き

かたで、じゅうぶんに大観することができる。展望によって、文末詞の大きな活動法則をとらえることもできよう。

よこの広い見かたのためには、ある程度まで、そこここの個の方言について、たての見かたがなされていなくてはならないことはもちろんである。もろもろの個の方言の、文末詞群の生態論的把握をかなりふまえることができて、その上で、よこの統一的な広い見かたをおこなっていくことができるならば、文末詞のとりあつかいとして、これはほぼ理想的であろう。——私は、このような記述方途をねらっている。

ここでは、しぜん、ある程度まで、複数事象を見ていくことにもなる。問題の主事象のもとで、である。

二つの方向が区別されるけれども、第二の方向による時は、おのずから、二つの方向の連関をはからなくてはならないことになる。

E　記述は、とどのつまり、高次の共時論になっていく。

上に言う第一の方向をとる記述も、要するに、文末詞の生態、文末詞利用の生活の中に、人間存在の歴史を見ようとするものである。歴史的存在としての人間の、言語生活のいとなみの、歴史的な深みを見ようとするものである。（——それゆえ、深く深くと掘りさげる記述の実践を、私どもは、自己にきびしく要求する。）この努力は、高次の共時論への努力にほかならない。

第二の、よこに見ひろげる研究方向を重んじる場合にも、個々の方言での文末詞の相関的事態を、それこれと見あつめつつ、事象をよこに見ひろげていくのであるから、単純な共時論的把握に出発しても、やがてその事象の流動変移・盛衰が把握され、これは事象の歴史的把握となって、共時論は、通時論を含む共時論、すなわち高次の共時論となる。その事象に関して、自律的発展が云々され、発展的動向が論究されれば、その記述は、それこそ歴史的記述の高次共時論になる。

第二の場合を、さらに実践的に説明してみよう。私の場合、文末詞の事象につき、全国に分布を求める。諸地域での事象の相互間には、しぜんに、系統・脈絡——系脈——がたどられる。そこで分布は、系脈分布としてとらえられる

ことになる。分布図製作は一見単純な共時論的作業のようであるけれども、できた図には、その事象の歴史像がある。（通時態がおのずからそこによこたわっている。通時態を含んだ共時態、歴史的共時態がそこにある。）図は、高次の共時態をものがたっているのである。図上の分布が系脈分布としてとらえられた時、分布図はもはや高次共時論的に解釈されているのである。——図からは、当然、その事象の盛衰・隆替のあとを見ることができる。将来のうごきも、予見することができる。過去を問い、将来を予想することができれば、その事象の、文字どおりの歴史的把握はできあがったのである。これが高次共時論の実質にほかならない。将来、私どもの生活の中で、その文末詞がどのようにうごいていくか（どのようにあつかわれていくか）というようなことについての論究をも、地道に可能ならしめるところには、高次共時論の有力な機動性があると言ってよい。私どもは、高次共時論的な追求態度によって、文末詞を、正しく言語生活上の問題とし、したがってまた、言語教育上の問題とすることができる。

高次共時論の作業は、文末詞について、その過・現・未を問題にする。「一貫するもの」として、過・現・未を問題にするのが高次共時論である。私は、文末詞をとりあげて、これを高次共時論的に討究してきており、ひいては、この見地で、日本語の動態・生態を見ようとしている。

文末詞に関する叙上のような研究を、日本語の文法の記述体系の中に大きく位置せしめるとするか。これによって生ずる文法学体系は、日本語の文法学として、ユニークなものであろう。一種の言いかたをすれば、私どもが文末詞記述を大はばにとりおこなうと、この記述は、従来の日本語文法学から、そうとうにはみ出す。記述が徹底的であるならば、はみだすことも大きかろう。じつは、そうあって、最後的には、独自の文法学が形成されるであろうと思うのである。

Ⅱ　方言文末詞一覧

以上の総論をふまえて、ここに、日本語方言文末詞の一覧表をかかげる。

方言の文末詞には、いったい、どんなものがどのくらいあるか。文末詞の存

立状況はどんなふうであるか。これをいちおう明らかにしておきたい。

方言の文末詞であるから、もとより、おのおのに、所在地域、分布がある。が、それを一々注記することはいっさい省略する。また、各文末詞の意義内容を注記することもいっさい省略する。ここではただ、ものがどのように群生しているかを明らかにしておきたいのである。

（ひとまず、「文末訴え音」の類はのぞいておく。——これは、のちの記述題目としたい。）

日本語方言文末詞一覧

一　ナ行音文末詞類

ナ、ナイ、ナイン、ナン

「ナ」の「ナー」、「ナイ」の「ナーイ」「ナイー」「ナーイー」など、長音のあるものを、別に立てることはしない。

「ナイ」の「ナェイ」など、ごく単純な訛形とされるものは、別に立てない。

以下、みな、この要領で、ものをあげていく。

ヤナ、ヤイナ、ヤンナ

イナ

エナ

ヨナ、ヨイナ

サナ

ザンナ

ゼナ

ゾナ、ゾナン、ゾイナ

ジョナ、ジョンナ

ドナ、ドイナ、ドヤナ

カナ、カイナ、ケーナ、カインナ、カエナ、カヨナ

ニナ

ノナ

トナ、トイナ

ツナ

ダイナ

タイナ

デナ、ヂナ

ガナ、ガンナ、ガイナ、ガエナ、ガヨナ

カラナ、カンナ

ケンナ、ケナ

キナ

サカイニナ、サケナ

ケンドナ、ケドナ

クライナ

クサナ

ベナ、ベオナ、ベイカナ、ベガナ、ベシナ

ペナ

ナラナ

ズラナ

ゲナナ

ヅナ、ヅダナ、ヅモナ

チャナ

トミーナ

ゴンナ

コトナ、コツナ、コッナイ、ゴツナ

ゴッタナ

モノナ、モンナ

モンダナ

モンジャナ

モンヤナ

モナ

ムンナ、ムナ

ムンダシナ

オンナ、オナ、オネ

ワイナ、ウェーナ

ワナ、ワナイ

ワヤナ

ワヨナ

ワサナ

バイナ、バイナイ

バナ、バナイ、バナン

バナナ

レナ

ラナ、ライナ

アンタナー

タナ

ナーナ

ソナ、ソヨナ、ソカナ

ハナ

ヘナ

ホイナ、ホレナ

エシナ

※ ※ ※

ニ、ニン

ゾニ

カニ

※ ※ ※

ネ、ネイ、ネン

ナネ

ノネ

ヤネ

イネ

エネ

ヨネ

サネ

ゼネ

ゾネ、ゾイネ、ズネ、ドネ

カネ、カイネ

ニネ

ノニネ

トネ、トヨネ、トイネ、タイネ、タネ、トカネ

デネ、ヂネ

ガ（カ°）ネ、ガネネ、ガンネ、ガ（カ°）イネ、ガイネン、ガイドネ

カラネ

ケンネ、ケネ

サカネ

クサネ

ベネ

ツネ

チャネ

テバネ

トモイナサンセネ

コテネ

モンネ

モンダネ

モネ

ムンネ

オネ

ワイネ、ワイネン

ライネ

ワネ

バイネ、トバイネ、トバネ

ソネ

ソラネ

※ ※ ※

ノ、ノイ、ノン

ニョ

ナノ

ネノ、ネンノ

ヤノ、ノヤノ、ヤイノ

イノ

エノ、トエノ

ヨノ、ノヨノ、ガヨノ、ヨイノ

サノ、サイノ

ザノ、ザイノ

ゼノ

ゾノ、ゾイノ

ドノ、ドイノ、ドエノ

ジョノ、ジョンノ

カノ、ノカノ、カンノ、カイノ、キャーノ、カエノ、カヨノ

ニノ

トノ、ツノ、タイノ

テノ、テンノ

チェノ

デノ、ヂノ、デンノ

レノ

ガノ、ガイノ、ガエノ、ガヤノ、ガヨノ

ゲノ

カラノ、カルノ

キャノ

ケンノ、ケノ

キノ、キンノ

サカイノ、ハケノ

ハンデノ

ケンドノ、ケンドンノ

ニノ

チャノ

コトノ

ゴデノ

モノノ、モンノ

ムンノ

オノ、オンノ

ワケノ、ワケラノ

ワイノ、ワエノ、ワヨノ

ワノ

バノ

ラノ

注1　以上、「ナ行音文末詞類」について、簡略に一覧表を作ってきた。それにしても、「ノ」なら「ノ」で、さまざまな複合形（「ナノ」「ワイノ」など）をとり集めなくてはならないので、「ノ」属に限って見ても、全体はそうとうに複雑である。

くわしくとりあつかうとなれば、じつは、長音のあるものを区別したのがよい場合が多い。たとえば、上の「ノ」の属の「モノノ」にしても、方言の習慣上、「モノーノ」の言いかたができており、また、「モノノー」の言いかたができている。これらは、おのおの一個独立のものと見たのがよい。

注2　つぎの「ヤ行音文末詞類」からは、簡約を旨として、複合形をいっさいとりあげないことにする。——どのように複合形が出てきがちであるかを、「ナ行音文末詞類」の場合から類推して下さるならば幸である。

二　ヤ行音文末詞類

ヤ

イ

エ

ヨ

オ（ヲ）

三　サ行音ザ行音文末詞類

サ

セ

ソ

ザ、ザン

ジ

ゼ、ゼン

ズ　ズイ

ゾ、ヅ、ゾイ、ツォイ、ゾン

ド、ドイ

四　「カ」文末詞類

カ、カン、カイ、カエ

ケ

コ

キ

五　助詞系転成文末詞

ノ

ン

ニ

ト、タイ

テ、チ

デ

ガ、ガイ、ゲ

カラ

ケン、ケ

サカー

バ

ケレド、ケンド、ケド

ドモ

バッテン

クライ

クソ、クサ

ヤラ

ジャ

六　助動詞系転成文末詞

ダ

デァ

ジャ

ナラ

ゲナ

ベ、ベ

七　動詞系転成文末詞

ゴン

コイ

シテ

トモイ、トミー、トモイナハイ、トモインサイ、トモイナサンセ

テバ、デバ

チヤ、チャ

チテー

チコ

チューワ

八　形容詞系転成文末詞

ハイ

キシャン（「きシャたない」から？）

九　形容動詞系転成文末詞

イカナ

十　名詞系転成文末詞

コト、コテ

モノ、モン

オン、オ

トコロ、トゴ

マエ

サキ

ヨッゼ

十一　代名詞系転成文末詞

ワレ

ワイ

ワ

バイ、バー、バン

レ

ラ

アンタ、ナンタ、ナタ、ノンタ、ノータ、タンタ、バイタ、バンタ

オマイ、ノマイ

コナ

コレ、ノッケ、ノッキャ

ソ

ナモ

十二　副詞系転成文末詞

ホンニ、ホニ

ハヤ、ハー、ハン、ハ

モー

マヅ（ズ）、マンツ、マツ

マー、マ

十三　感動詞系（＝文系）転成文末詞

モシ、ムシ、ムサ

モ、ム、メ

シ

ナモシ、ナンシ、ナーシ、ナッシ、ナシ

ナモ、ナム、ナオ

ニシ、ニセ、イシ

ネンシ、ネーシ、ネシ、ネミ

ノモシ、ノンシ、ノイシ、ノーシ、ノッシ、ノシ

エモシ、エムシ、エモ

オイ、オエ、オヤ

ヨイ

ホイ、ホン、ナムホイ、ナンホイ、ネホイ、ノンホイ、ヤンホー

コラ、コレ、コリ、コロ

ソラ、ソレ、ソリ、ソロ、ソーロ、ソ

ホラ、ホレ、ホリ、ホロ

ハラ、ラ、ハレ

サラ

サー、サーン

セー

アラ、アレ、アイ

ヤラ、ヤレ、ヤイ

ドレ

ハテ

フン

ヘン、ヘ

マ、マン

文末詞存立のはばは広く、奥ゆきは深い。以上は、私の今日までのしごとを、ほぼ八分どおり整理して得た結果である。私自身、道の遠いのを思う。——整理しようと思えば思うほど、この世界がひろがっていき、深まっていくのを、おどろきの目で注視しているようなしまつである。

以上の「文末詞一覧」が、簡潔すぎて、わかりにくい点もあるだろうことをおそれる。

後日、文末詞に関して、くわしい発表をして、責めをはたしたいと思う。

Ⅲ　文末訴え音について

上の一覧表では保留した「文末訴え音」につき、かんたんな記述を試みたい。

方言の研究において、文末詞に関する研究は精細にしていくのに、いわゆる文末訴え音にも眼を注いでいくのは、はなはだ有意義なことだと考える。なによりも、方言の研究は、音声言語の研究だからである。音声言語としての方言の、活動の機微にせまっていくがためには、その音声言語の音声の現象の微細にわたっても、せまるところがなくてはならない。

文末詞に関連して「文末訴え音」を指摘する方法は、私の、私なりの、言語の現場に即した音素論でもある。音素を、私は、こうして、文字どおりの機能体として受けとる。

「文末訴え音」は、文末詞の作用をする、「詞」以前の「音」である。（——それが、習慣的に発現されるものを言う。）文末詞を定着形とすれば、文末訴え音は、やや非定着的なもの、やや不安定なものである。（しかし、偶発的なものではない。）独立性がややよわい。普通の文末詞は独立詞と言ってよいが、文末訴え音は半独立的なものである。文末詞の場合は語形を云々することができるが、文末訴え音の場合は、音形を云々するのがふさわしい。品詞論的には、文末訴え音は、まず準文末詞と言うことができよう。私は、文法論としても、従来の文法学の品詞論のわくを越えて、いわば方言研究にふさわしく、音声的な準文末詞を認めようとする。

方言研究上では、その文法研究の場合にも、音声表現論的な見地が重要視されなくてはならない。

文末訴え音が、訴えの効果を発揮し、呼びかけの性格を持つことは、通常の文末詞の場合と同様である。感声的文末詞と言われるもののはたらきと、文末訴え音のはたらきとには、よく似たところがある。両者を比較する時、文末訴え音という感声にも、やがて感声的な文末詞になっていく可能性のあることが察知せられる。原理上、感声的文末詞は、文末訴え音——または訴えの感声——の定着せしめられたものと考えることができよう。

文末訴え音としては、第一に「ア」音がある。第二に「オ」音がある。第三に「ン」音がある。その他、「イ」音なども考えられなくはないかもしれないけれども、今はこれらを除外しておく。

「イ」に関して、注しておこう。

○サムイ　ノイ。(寒いね。)

の「ノイ」など、通常の文末詞の、「イ」音を持ったものがある。「ゾイ」「カイ」にしても、同様のものである。これらに見られる「イ」も、もともとは、文末訴え音かもしれない。たとえば、「ノ」を言ってつよく訴える時、これは「ノー」となり、かつ、長音変じて「イ」音ともなる。「イ」は訴えの所産とも見られる。が、「ノイ」「ゾイ」などの場合は、「ノ」「ゾ」と訴えたところで、派生的に、「イ」音を産み出したとも見られるので、このような、文末詞に直属する「イ」音の場合は、これを取り立てて文末訴え音と見ることはしない。「ノイ」は「ノイ」の一体者と見、「ノイ」でつよく訴えるものと見る。「ノイ」「ゾイ」「カイ」、みな、〔—oi〕または〔—ai〕で、「イ」〔i〕は、大きい母音のもとに派生している。「ノイ」なら「ノイ」の、自然の一体形であることが明らかであろう。

× × × × ×

「ノン」「ゾン」「カン」などの、「ン」のきた場合も、「ン」は、大きい母音〔o〕や〔a〕のもとの「ン」で、これの従属音であることは明らかである。したがって今は、「ノン」なら「ノン」を、自然成形の一体者と見る。

「エ」も、「ノエ」「ゾエ」「カエ」など、大きい母音のあとに、従属音として、自然に派生しやすい。そのような場合には、「ゾエ」なら「ゾエ」を、一体のものとして見る。(「ゾ+エ」の「ゾエー」などもあるけれど。)

「ン」に関しては、別に、これを文末訴え音として取り立てなくてはならない場合がある。たとえば、東北方言下での、宮城県地方に多い、

○コッチャ　ゴザイン。(こっちへおいでなさいな。)

などの「ゴザイン」の場合など。文末に微妙な「ン」が添えられると、文表現は俄然、やわらかな、時にとっては上品なものになる。——おやが子を呼びつける時などには、「ゴザイ」としかならないのである。上のような「ン」は、まさに文末訴

え音の顕著なものとされる。

「ア」音や「オ」音は、聞こえの大きい母音である。文末で、このような広母音が用いられるようであるならば、これはいかにも訴えの用に立ちそうである。私は、おもにこの種のものに関して、「文末訴え音」を考えようとしている。

以下には、特に「文末訴え『ア』音」について、一とおりの記述をする。

文末訴え「ア」音

一　文末訴え「ア」音への私の気づき

昭和十年代のいくどかの東北方言調査では、仙台弁などに関して、「シャ」という文末詞があると、単純に考えていた。

○アノッ　シャ。

あのね。

などに見られる「シャ」である。これは全国でもめずらしい、この地方特有の文末詞であった。それにしても、

○モシャ。

もし。

の時はどうなるか。「シャ」を除くとあとは「モ」である。釈然としないまま、——それにしても耳につく「シャ」文末音のいちじるしさのため、総体的には、「シャ」とか「ノッシャ」(「いつきたノッシャ。」)とかを、一定の文末詞としてとりあつかってきたのである。ところで、昭和39年7月なかばの一週間、青森県西津軽郡旧木造町で、いわゆる津軽弁の一部を日々満喫していたさい、

○四月(ゲツ)になればノァー。

というような発音に、毎度、耳を打たれることになった。文表現の表現末で、声を自然のうちに大きく〔a〕に開く発言法、これが、しだいに、土地の方言習慣としてとらえられたのである。その特別な発音の表現効果も、順次、帰納することができた。

○ンダ　オンシ〔i〕ァー。

だもんねえ。

など、「シャー」と聞こえがちのものもふんだんに出てくるではないか。「シャ」

？ この時、私は、宮城県地方の例の「シャ」「ノッシャ」を思い出した。――同じものではないか！　そういえば、宮城と津軽とは、――途中の地域のことはしばらくおいて――、「ます」を「ス」とするなど、かんじんなところで、似たものを示す。津軽弁の実例について、文末「ア」音を取り分けてみると、みんなきれいに分かれる。「ッダ　オンジ〔i〕ァー。」の場合も、これの「シ」が「もし」の「し」であることは早くからわかっていた。それゆえこの場合の「アー」も、難なく切り離せたのである。津軽では「もし」の「シ〔i〕」に「ァ」をつけている。そうだ、仙台弁のも、「モシャ。」は「もしァ。」なのだ。こうわかってきたのである。「モシァ。」が、「モシャ。」とも聞こえるように発音されているのだ。「アノッシャ。」も、もともと「あの　シ（もし）ァ。」なのだ。こうして仙台弁の不可解だった「シャ」が解けた。（一部の発表に、「“山形弁”と“宮城弁”」<『国語学』第70集、昭和42年９月>などがある。）

仙台弁の「シャ」文末詞の実体がわかってみると、関連してすぐにわかることがあった。それは出雲弁の「ニャ」文末詞のことである。この「ニャ」を、私ははじめ、ナ行音文末詞の「ニ」に関係のあるものかと推測していた。が、そうではなくて、これも「ネァ」であった。文末訴えア音が、「ネ」に添わったものなのである。それのきょくたんなもの、土地弁色の濃いものが、「ニャ」とも聞こえる。「ネ」が〔ne̞〕でもあるので、「ネァ」はいっそう以て「ニャ」に近く聞こえもする。ついに土地人も、“出雲の人は猫がなくように言う。”と語ることになるのである。

津軽弁の調査によって、私は、文末訴えア音の存在と効果とに、はっきりと目を見ひらくことができた。

> じつは、昭和33年10月の、秋田県仙北郡田沢湖町生保内での一週間調査の時にも、文末訴えア音を聞きとめたのであった。調査記録を見ると、たしかにそれの実例がとらえてある。しかし、当時は、文末訴えア音という考えかたには到達していなかった。（「文末の無意味装飾音アーをよく聞く。」などと記録してある。）ものをはっきりと見さだめたのは、津軽においてであった。それにしても、津軽調査に早く先だって、秋田県下でも、文末訴え音とすべきものをとらえていたのは、調査者として、愉快である。虚心にものを見つめ、すなおにそれをとらえる調査のできていたことをうれしく思う。

「ア」音は、訴えかけ音として、まったく効果的である。「もし」の「し」なら「シ」でおわるのを、さらにくふうして母音拡大の方法をとり、拡大母音で訴えをつよくしようとする。まことに合理的である。合理的であって、ことはしぜんに、音声上の生理・必然としておこなわれている。

津軽弁をまたなくても、このような拡大母音による訴えかけ――（それが自然のうちに、無意識的におこなわれていること）は、民間そこここの言語生活の中にも見いだされることであった。たとえば旧軍隊時代でも、人は、「気をつけ！」の号令をかけるのに、大声で、

○キオツケア。

○キオツケヤ。

と言ったものである。「ツケ」の〔e〕母音をしぜんのうちに〔a〕に開いた。これで、このさいはこれなりに、訴えの効果を大きくしたのである。（号令となれば、ともかくつよく、相手がたにはたらきかけなくてはならない。）

バスの女性車掌がしばしば、

○オライヤー。　オライヤー。

と言う。くるまの後退を、車後で運転手に案内する時など、「オーライ。オーライ。」と言うつもりで、いつとはなく「オライヤー。」などと言うようになっている。「オーライ。」を、軽快に「オライ。」などとしていよう。（これを「アライ。」に近く発音してもいる。）「オライ」と、つめた言いかたをすると、「オライー。」と伸びる。伸びると、その言いとめのところで、「イ」の時の舌が下に降りて、「イ」音はもっと開いた母音になる。そこで「ヤ」などという音もできる。運転手につよく「オーライ。」を訴えようとすれば（――よく聞こえるようにと思えば）、しぜんに、「ヤ」の発音になるほどに、口を開きかつつよく言うことになるのであろう。

近ごろの「歌謡」歌手の中にも、似たような「ヤ」を出す人がある。文表現の音声上のいきおいで、発音がしぜんにそうなっていくのであろう。

さて、現代諸方言上の文末訴えア音は、つぎの二、三、に分けて観察記述することができる。

二　単純に文末訴え「ア」音の出てくる場合

（これは、通常の文末詞のもとに随伴複合して文末訴えア音のあらわれる場合に対するものである。）

1.　助動詞の直下に文末訴えア音の出る場合

津軽弁で、

○ホンダベァー。

そうだろう。

と言う。

○ヤマサ　イ〔i〕グベァ。

山に行こうよ。

と言う。

津軽の東の南部地方でも、

○イットキ〔i〕　ヤスムベア。

ちょっと休みましょう。

○ノルベアー。

いっしょに乗ろうよ。

などと言う。——こうして、「ア」音のきわだたしい（大きい）例も聞かれる。

秋田県東での一例には、

○キ〔kçi〕ンヂ〔dʒi〕　ヨロコンダベァー。

金治は喜んだろう？

がある。

山形県下の南寄りでの調査のさいにも、文末訴えア音がかなり聞かれた。

○オッケーベァー。

大きいだろう？

は、その一例である。

福島県会津西北部の例には、

○シャタク〔ü〕　アッ　トコベァー。

社宅がある所だろう？

のようなのがある。

「ベ」助動詞のもとに文末訴えア音のくるものが、こうして、奥羽に広く見いだされる。岩手県下にもある。奥羽に関連して、北海道内でもこれが聞かれる。

他の助動詞の場合を見ると、宮城県下の文末訴え音もとらえられて、奥羽での文末訴え音の分布は、いよいよそうとうに認められることになる。

室山敏昭氏によれば、丹後半島に、断定の助動詞「ダ」「デァ」のあとへ、文末訴え音「ア」をつける所があるという。

2. 助詞の直下に文末訴えア音の出る場合

津軽弁で、

○ユキ〔i〕 ッモッテァー。

雪が積もってさ。

と言う。助詞「て」のもとに「ア」音が出ている。文末訴え音である。「雪が積もって」という発言を、いかにもはっきりと相手に送ろうとして、「テ」と強調し、それとともに、「テ」の〔e〕音を〔a〕に開いて、訴えの心をしぜんに顕示しているのである。

同様のことが、越後北部でも見いだされる。(のちに、p. 70に掲げる大橋勝男氏の研究による。)

3. 動詞の直下に文末訴えア音の出る場合

青森県下の津軽・南部に、

○おもしろければ遊ぶよ。→オモスレェ(ろけれ←ii)ンバセェアスンブァ。

(南部の津嶋金次郎氏による。)

のような言いかたがある。この例だと、文末部の動詞「アスンブ」のもとに、「ア」音があらわれている。『全国方言資料』第1巻の青森県の部にも、「モドテクルァ」(もどってくるよ)「イッテクルア」(行ってくるよ)などが見えており、「ア」が、「よ」と、対訳されているのが注目をひく。岩手県下にもこの種の「ア」があり、南、福島県下でも、その『福島県中村町方言集』に、

おくれ　下さい、「おくれぁ」

などとある。

4.　名詞の直下に文末訴えア音の出る場合

『青森県南部方言考』（寺井義弘氏、昭和37年）に、

「このくさればつこぁ」

とある。「くされ婆」の下に「ア」音がきている。悪態の、顕著な呼びかけのため、文末訴えア音を産むことになったのだと思う。同じく南部の、

○エ〔e〕ートホンニャグアー。

えらいごちそうさま！

と言う「ホンニャグ」は名詞なのかどうなのか。ともかくその下には「アー」がきている。相手への言いかけ——訴え——の効果を、この「アー」が示しているであろう。

5.　特殊慣用文の場合

能登方面では、否定の意を簡潔に表明するのに、「ナンモ。」と言う。返事文である。これが時に、

○ナンモァー。

となる。文末に「ア」音がくる。（接続助詞の場合も、「……タレドモ、」が「……タレドモァー、」などとなったりするらしい。）

同じく能登方面で、「ええ。」の返事が、

○エァー。

ともなるという。（愛宕八郎康隆氏、珠洲市で調査）

6.　文末長音

文末訴えア音ではないが、文末に顕著な長音のあらわれる場合、たとえば、

○行カナンダー。

行かなかったよ。

のような場合にも、その長呼部に、多少の訴え性能を認めないわけにはいくまい。「ア」音に関連するものとして、長呼音が注意される。

7.　文末訴えア音の発展形

青森県の「南部」地方で聞きとめたものに、

○オセーデ　ケロアーイ。

教えてくれろよ。

がある。この「アーイ」は、上来の文末訴えア音の発展形ではないか。すでに見てきたように、「ア」音はしばしば大きい「ア」音ともなっている。——そこへアクセントの高音部が、上がり調子できたりしている。このような傾向からは、「アーイ」というような音形も、醸出されるはずかと思う。ただし、この「アーイ」が、どの程度に社会習慣化しているものなのかは明らかでない。ただ、土地の有識者がこのカードに注記して、

中以上（女）　普＜＝普通程度のおこなわれかた＞　中＜＝中等品位＞

としてくれているのからすると、「アーイ」の言いかたも、個人的なものではないのだろうと思われる。

「ア」に似た「アン」というのもある。『方言の研究』創刊号（新潟大学方言研究会、昭和44年3月）の「新潟県中蒲原郡横越村川根谷内方言」の中に、

○オンナスニ　シテスマイマス　アン。（同じにしてしまうのです。）＜中・女→青・女＞

とある。さて「アン」は、「ア」の発展形かどうか。

8.　「ア」音を以て訴えること

最広最大の母音「ア」が、訴えの料に用いられていることには、いくえにも注意をはらう必要があると思う。ただし、この「ア」音について、表現品位上のことを云々することは、まずできないように思う。「ア」だから上品だとか何とか言うことはできないようである。

三　通常の文末詞のもとに随伴複合して文末訴え「ア」音のあらわれる場合

「文末詞＋文末訴え音」は、「文末詞＋文末詞」の、いわゆる複合形文末詞に対応するものと、見て見られないことはない。

1.　「ナ＋文末訴えア音」

たとえば岡山弁で、

○エー　ナーア。

いいねえ。　＜つよく同意を求める。＞

と言う。「ナー」の単純長呼でなくて、終わりが「ア」となっている。この習慣的な言いかたの場合、私どもはここに、「ナー」の単純長呼ではすまさない

発言意図を認めたい。すなわち、最後に「ア」を産んでいるところに、特別の訴えかけの意図を認めたいのである。

このような発言傾向は、おおよそ、近畿地方内に見いだされやすいようである。但馬・奥丹後はことに注目される。

近畿から離れて、東北地方の小松代融一氏『岩手方言の語彙（旧南部領）』に、

アノナエァ　　あのね、　　もしもし

とある。これにも、「ナー」に近い「ナエ」に随伴する文末訴えア音が見られよう。東北もやはり問題の地とされる。

2.　「ノ＋文末訴えア音」

津軽弁での「ノァー」の例は、さきに掲げた。（p.61）「ノァー」のおこなわれることは、津軽でさかんである。

「ノゥ」となったものはどこにもない。「ノ」〔no〕の〔o〕母音が、さらに大きくなって〔noa〕となる。訴えの訴えたるゆえんである。（訴えかけるのには、訴えかけ性能の大きいことをねらうのが当然であろう。——それが、自然の音声生理としておこっている。）

3.　「ネ＋文末訴えア音」

最初に、さきにもふれた出雲地方の「ネァ」を見る。松江市中心に、「ネァ」がさかんであろうか。そうとも言えるかもしれないが、郡部でも、「ネァ」がかなりさかんである。一般に「ネァ」の抑揚になり、「ネァー」は聞かれない。これは一傾向と見られる。「ネァ」は〔nea〕〔nęa〕と聞こえ、また、〔nea:〕〔nęa:〕ともなる。「ニャ」「ニャー」とも聞こえることは、さきにもふれたとおりである。実例をあげよう。

○デキ〔i〕ンガ　ネァ（ニャ）ー。

できないがねえ。

これは島根半島北岸での一例である。

○カミ〔i〕ー　アゲマシ〔i〕タ　カイネァ。

紙をあげましたかね。

これは松江市内での中年女性の発言例である。

○ソーデス　ネァー。

これは、松江市内の旅館につとめる一女性の発言例である。この人は共通語でものを言おうとしており、この時も、「そうですね。」と言ったつもりのようだった。しかし、文末には、「ァ」がついたのである。このようなことが、この人にたびたび見られた。（この人は、出雲市平田の出身で、四十才台の人だった。）別の宿で、そこにはたらく女性のむぞうさな発言に接したが、その時は、しばしば、

○アン　ネァ。

あのね。

と言っているのを受けとめることができた。聞いてみると、"「あのね。」と言っているつもり。"とのことだった。加えてこの人は、"お客さんからはニャに聞こえるそうですね。"と語ってくれた。——この人の「ネァ」は〔ṇeə〕のようだった。さてまた別の宿では、"「ネー」が「ニャー」に聞こえる。言う方は「ネー」を言っている。"と語ってくれる人があった。出雲地方では、老若男女に、問題の「ネァ」を聞くことができる。

出雲地方については北陸が、「ネァ」を存する所として注目される。北陸を見る前に、但馬のつぎの一例をあげておく。

○ヨッチャンガ　フレトッタンネァー

よっちゃんが　ふれていたね。

これは、『全国方言資料』第10巻の「兵庫県城崎郡城崎町飯谷方言」の中に出ているものである。「ネァー」とあるのが、ここで問題になる。

北陸では、まず若狭で「ネァ」を聞く。遠敷郡上中町の人の発言には、

○シラン　ネアー。

知らないよ（ぞ）。

があった。小浜湾頭の小部落でも、「ニャー」に近いものを聞いた。

○アッテ　ネァー。

会ってね。

○ネァー。タタカレテ　タタカレテ　ナェァー。

ねえ。たたかれてたたかれてね。

○サブイノニ　ネァー。

寒いのにね。

これらは、能登の宇出津で聞きとめたものである。越中東部に行くと、

○セナカデモ　ネァー。

せなかでもね。

○ワタシ　ネアー。

わたしね。

○ブチョーサンモ　オイデルシ　ネア。

部長さんもいらっしゃるしね。

のような発言が聞かれる。「ネァ」が「ニァ」に近くも聞こえる。「ネ」の〔e〕が〔ẹ〕になりがちのためであろう。（越中に中舌母音や〔ẹ〕はかなりいちじるしくもある。）——越中では、女性の方に、「ネァ」は、より出やすいのか。つぎは越後で、

○ソーンダドモ　ネァ。

そうだけれどもね。

などを、下越で聞くことができる。（大橋勝男氏による。）大橋氏には、「新潟県北蒲原郡豊栄町高森方言の大末訴え微妙音」（『方言の研究』第2号第2冊、昭和45年3月）の発表がある。これは私の「文末訴え音」の考えを踏襲した一記述である。「文末訴え音」を、かつて私は、「文末訴え微妙音」などとも言った。

北陸道は、文末訴えア音の注目される地域である。山陰から北陸へ、つぎに東北へと、文末訴えア音がたどられる。

北陸での場合、「ネァー」などの抑揚もあるのは、山陰とのちがいとして重視される。北陸越後にはまた、「ネーァ」の言いかたもあるという。（大橋氏の上記論文による。）

秋田県下の東能代で聞きとめることのできた文末訴えア音例は、つぎのとおりである。

○ドゴダケ　ネァー。

どこだろうかね。

○ア、ホンダ　ネァ。

あ、そうだね。

○モス〔ü〕コシ〔i〕　フレバ　ネァー。

もうすこし降ればね。

「ニァ」にも聞こえる。

青森県下の津軽に「ネァ」があり、宮城県下にもこれがある。

九州、「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」に、

○コリャ　モー　マケラレンモンネァー

これは　もう　まけられないんだよ

とある（『全国方言資料』第6巻）のは、文末訴えア音を、「ネ」のもとに認めしめるものであろうかどうだろうか。

関西内・九州内では、「ネヤ」という複合形文末詞が、それの発音だいで、「ネァ」に近く聞こえる場合もあるかと思う。

4.　「モシ・シ（セ）＋文末訴えア音」

津軽弁では、

○モシ〔i〕モシ〔i〕ァー。

もしもし。　＜電話＞

などと言う。

○アノ　シ〔i〕ァー。

あのね。

などとも言う。——同様のことが、宮城県下・山形県下にも見いだされる。これらでは、「もし」「し」の下に「ア」を見せている。なお、青森県下では、西の津軽に「しァ」相当の「セァ」があり、東の南部には、「しァ」相当の「サェ」（能田多代子氏『青森県五戸語彙』）が見いだされるようである。北海道内にも、同じく「しァ」相当の「セァ」があるらしい。

5.　「ネシ＋文末訴え音」

津軽弁に、

○ソッダ　オンネシ〔i〕ァー。

そうですものねえ。

などの言いかたがある。「ソダベネシァ（そうでしょうね。）」などとも言っている。（『全国方言資料』第１巻の「青森県南津軽郡黒石町方言」による。）『青森県方言訛語』の、

○そしてねさァ（そしてねー　あなた）

も、あるいはここに引用すべきものか。

越後下越でも、「ネシ〔i〕ァ」「ネッシ〔i〕ァ」などを聞くことができる。（前記大橋氏論文による。）

6.　「ノ<助詞系文末詞>シ＋文末訴えア音」

仙台弁で、

○下ゴ　イグ　ノシ〔i〕ァー。

どこへいらっしゃる？

と言う。

7.　「ゼ＋文末訴えア音」

小松代融一氏によると、岩手“県南部（内陸方面）”に、

○「けぁるゼァ」（帰るヨ）

がある。（『方言学講座』第２巻　岩手）

愛宕八郎康隆氏によると、能登半島東北端の珠洲市木ノ浦に、

○ハヨー　セニャ　ナランカ°デァ　ゼァー。

早くしなくてはならないよ。

がある。

8.　「ケ（かい）＋文末訴えア音」

『全国方言資料』第３巻の「富山県氷見市飯久保」の条に、

ｆオイデナハルマスケーァ

おいでになりますか。

とある。

近畿の播磨で、かつて私は、

○オマハン　スシ　タベテ　ケァー。

あなたはすしをおあがりになります？

の言いかたを聞いた。伊予東部の人が、

○ホー　ケァー。

そうなの？　　<軽く受けとる。>

と言う。「ケァー」とともに、「ケヤー」もある。

能登の珠洲市方面の調査結果として、さきの愛宕氏の報じるところによれば、「おお。」の返事の、

○オー　ケァー。

の言いかたがある。この「ケァー」は、上来のとは別種のもので、「これ」に淵源する代名詞系文末詞「ケー」に、文末訴えア音の熟合したものであろう。

9.　「コト＋文末訴えア音」

『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形方言」の条に、

fヤー　メンコエ　ンボゴダゴドアー

やあ　かわいい　赤ん坊だこと。

とある。「ゴドアー」は、「コト」という文末詞に文末訴えア音の添わったものか。

四　文末訴え「ア」音の分布

上来の、文末訴えア音の出現するいろいろの場合を総合して、これの出現地域を見るならば、第一には奥羽がある。関連しては北海道がある。奥羽については、つづきの北陸道が注目される。ついで山陰が問題になる。九州に若干の問題がある。文末訴えア音の分布は、おおよそ以上のとおりである。

全体はほぼ「東北・裏日本」系の分布と見られようか。他の事象の分布で、これと同じ分布様式を示すものは多い。たとえば〔i〕〔ü〕〔e〕音の分布も、まさにこの文末訴えア音の分布と同式である。かれこれ合わせて言いたいことは、「東北・裏日本」系の分布が、だいたい、日本語諸方言上の古系脈分布と見られるということである。

文末訴えア音そのものが古音だなどとはなかなか言えまい。しかし、これの今日、存在する地域は、かねがね、方言上の古系脈地帯と目されがちの地域である。ほかならぬこの地域に、特に文末訴えア音のかなりさかんなのは、これも、なにか、古系脈に深く関与した事実かと思わせられるのである。「ヂャ」

に相当する「デァ」、と見られるものは、東北・北陸、それに丹後半島のうちに見いだされる。「デァ」は、もののより古い形ではあっても、より新しい形ではあるまい。文末訴えア音は、おもしろいことに、「デァ」の分布と、およそ軌を一にしている。

さて、九州南部、薩摩に、

○シンシャデン　トッテ　ミヤンセ。ホンニ　ヨカッデア。

新車でも購入してごらん。ほんとにいいから。

○アヤ　モドリ　ヨラッドデア。

あれは帰りに寄りなさるだろうから。

○カッガ　アッドン、モッテ　キダイモハンタッデア。

柿があるけれども、持ってこられないものですからね。

○キダイモハンデア。

こられませんからね。

○キダイモハンヂャシタデア。

こられませんでしたからね。

などの言いかたがある。見ると、一様に、接続助詞の「デ」で文表現がむすばれており、そのあとに「ア」が来ている。土地人に、この「ア」が、「ね」と、対訳されたりしている。今もし、この「ア」を文末訴えア音のけざやかなものと見るなら、問題の文末訴えア音が、じつに九州南部にも存するとしうることになる。こうなれば、文末訴えア音は、まさに国の東北と西南とに対応的にも見いだされることになり、かつ、裏日本の広い範囲にこれの分布することも認められるので、要するに、文末訴えア音は、日本語諸方言上の特定重要地域に分布するものと見られることになる。この分布状態は、他の事実の同様の分布状態と重ねあわせて考えるのに、おおよそ、ゆえ深い、古態的分布とされるものかと考えられる。

九州の分布をも考慮に入れる時、ますます、私どもは、文末訴えア音の今日の存在状態を、なにか古い習慣にさおさすものではないかと、推量してみたくなるのである。

すくなくとも、こういうことは言えよう。文末訴えア音が、その発出法と音

の性質とからして、古態のものとはきめがたいものであるにしても、これが、今後、新生のものであるかのようないきおいを以て、大いに広まっていくようなことはあるまい、と。すなわち、今日の状態からするのに、文末訴えア音をおこす習慣は、今後、より広汎な地域に蔓延するだろうとは見られないのである。

文末訴えア音が「アーイ」などの形に発展する事態をさきに見た。(p.66) 今日、この種の発展形をかず多く見ることはできないけれども、言語生活の近代化は、一般に、文末訴えア音などによる訴え方法を、他の有形文末詞利用による訴え方法に、脱化・転化させてもいるのではないか。

Ⅳ　主として文系（＝感動詞系）転成文末詞について

——呼びかけ心意 実証——

文末詞記述の第二章として、——(上の文末訴え音の記述に対せしめて)——、特に、文系の転成文末詞をとりあつかう。ここに、文末詞の自由な創作創造を見、文表現での、文末詞による呼びかけ・訴えかけの心意を実証することにしたい。

この章を、私は、さきの「総論」の章に対せしめたいと思う。

一　文系文末詞について

私は従来、「モシ」などの文末詞化したものを、「文系文末詞」と呼んできた。「モシ。」などは、特殊慣用文と見られるものだからである。

しかし、文は表現の現実態で、個別的なものである。これが特定慣用のものであっても、——かなり固定的であっても、「文系」と言えば、それはどうしても、現場の「文」の、という意味になる。こういう名称は、品詞名による「代名詞」系などという名称とは均しくない。転成文末詞の名で、品詞名によっていない名は「文系文末詞」のみである。この不揃いを訂正して、今後は「文系文末詞」を「感動詞系文末詞」とする。

およそセンテンスとあれば、どんなセンテンスも、その表現相を解体して単

語の世界に還元することができないものはないはずである。どんなかんたんな文表現も、どんな特殊な短文・簡潔文も、文である以上、語に還元することができるはずである。(還元しないでおくことが例外的にゆるされてはならない。)この意味において、「モシ。」などの特殊文も語に還元しうる。そのさい、この種のものは、感動詞という語類——品詞——に属するものと見られる。(従来の品詞分類へ当てはめるかぎり。)このゆえに、いわゆる文系文末詞は、感動詞系文末詞と言いかえられる。

二　「モシ」「ナモシ」の類

この類については、以前に小論を発表した。

「対話の文末の『よびかけことば』——『ナモシ』類その他について——」
(広島大学文学部紀要第9号、1956年)

今は上稿にゆずって、「モシ」「ナモシ」の類のことはここに省略する。

三　「オイ」「コラ」「コレ」「コロ」

相手を呼ぶことばとしては、「オイ。」というのも、「モシ。」というのとあい似ている。「モシ。」の呼びかけが、やがて「モシ」文末詞に定着したのと同様に、「オイ。」の呼びかけも、「オイ」文末詞に定着してもいる。

○アア困ッチヤッタ　オイ。(あゝ困ったなあ)

○重テイヤ　オイ。(重たいなあ)

佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」にはこう見える。(『国語研究』第十巻第七号)氏はここで、「オイ」に「なあ」を当てられるとともに、「軽い感嘆の言葉。主に相手に呼びかける様な言ひ方である。」との説明を前おきしていられる。おそらく、「オイ」が、文末詞として受けとられるような発言になっているであろう。

羽後の船川港では、

○ドーカ　タノムデ　オイ。

どうかたのむよね。

と言っている。"「オイ」は調子ことばだ。"と説明されたが、そのような「オ

イ」のつけそえかたは、もはや「オイ」を文末詞としているものである。——「オイ」に、もはや「オイ。」の呼びかけ文そのままの効果は認められない。——「タ$\overline{ノ}$ムデ　オイ」と、文アクセント（抑揚）は「$\overline{ノ}$」から下がりっぱなしのままである。「オイ」に特立性はない。それでいて、「オイ」にやはり相手へのうちかけの効果はあるところに、文末詞化した「オイ」の、一定の性能と風格とが認められる。上の例は、近しい者同士の間のことばとされている。「オイ」は、「モシ」に対立する地位にあり、中等以下の品位の表現に役だつのである。

「モシ」に対して「ナーモシ」→「ナモシ」ができているように、「オイ」に対しても、「ナーオイ」ができている。ただしこの方は、「ナーオイ」と表記すべきほどの言いかたになるのが普通であって、「ナオイ」はまず見ることができない。「オイ」は、「ナー」と熟合しにくいらしいのである。そこには、「オイ」と「モシ」との、品位とは別個の、言語形式としての相違（音韻論的にも）、語性の相違が認められよう。

そのような「オイ」と性質の近似したことばに「コラ」がある。「コラ」に似たものに「コレ」がある。

呼びかけ文として、「コレ。」の言いかたがあろう。もともとこれは、「コレ」という指示代名詞に関係の深いものかもしれない。が、ともかく、「コレ！」などという言いかたは、特殊慣用の文として成り立っている。この点をたてにとれば、「コレ！」の文末詞化は、いわゆる文系の転成文末詞の出現とすることができる。

「コラ」となると、これは、もはや代名詞起源のものなどと言うことはできない。「コラ」は呼びかけ専用の一単語とされる。そういう単語は感動詞と言いうるものである。「コラ」の文末詞化は、当然のことであろう。その「コラ」文末詞の呼びかけ品位のことは、多く言うまでもない。

「コラ」の類縁の形ではないか、「コロー」というのがある。越後北部の近海に粟生島というのがあり、そこで、

○コー　シ$\overline{タ}$　コ$\overline{ロー}$。

こうしたとさ。

と言う。これは、同島に長く国民学校（今の小学校）長をしていられた脇田氏から、以前に教示されたものである。「コロー」が文末詞の役わりを演じていることは明らかであろう。脇田氏らも、これを、「とさ」と訳すべきだと説かれた。おそらく、「コラー」に近いのが「コロー」であろう。訴え専用のものとなって、このような変形を来たすところが注意すべき点である。

四　相手を呼ぶ

訴えるのは相手に向かって訴えるのである。たいせつなのは相手である。相手に呼びかけ、訴えかける。訴えるとは相手を呼ぶことである。

「モシ」や「オイ」などを見くらべていく時、私どもは、人が発言上いかにつよく相手を求めているかを知ることができる。相手を求めるのは、ほとんど人の根源的な欲求であろう。その、内面の、根源的なものが、時処位に応じてうごきはたらいて、種々の訴えことば・呼びかけことばになる。内面的なものの発動を、内面勢力の展開とも言うことができよう。

その展開の、広いはばの一局に、相手を「アナタ」「オマイ」などと、人代名詞で呼ぶ呼びかけ表現法がある。かくして人代名詞類も、あいともに文末詞化してもいるのである。

代名詞系の転成文末詞は、当面の主題「文系（＝感動詞系）文末詞」からはそれるものであるけれども、それの相手を呼ぶさまはまことに顕著なので、今は、文末詞の呼びかけ心意を明らかにするために、あえて、人代名詞系文末詞をも、その直接的な呼びかけ性に注目しつつ、文系のものに準ずるものとして、ここにとりあつかう。

「モシ」や「オイ」「コラ」の呼びかけには、大した内実がない。それらに対して、「アンタ」というような人代名詞系文末詞の呼びかけには、内実が豊富である。はっきりと相手を呼ぶからである。

静岡県井川村方言の、“女だけ用ゐる言葉、接尾代名詞「アンター」”と言われる、

○行カズヨアンター。（行かうよ）

などの「アンター」は、文末詞化した「アンタ」を受けとらせるものではない

か。（岩井三郎氏の報告による。『方言研究』第四輯）「アンタ」はもともと代名詞であるけれども、こうして呼びかけに用いられているのを見ると、「オイ」などの呼びかけをいっそう色こくしたもののように思われて、現場に即して言えば、「アンター。」という、呼びかけの「文」があるようにも思えるのである。

○ホンジャッテ　ワレ。

だってさ。

私の郷里（伊予大三島北部）の方言での、老人のこの言いかたも、文末詞化した「ワレ」をとらえしめる。このさいも、「ワレ」は、文的なものとして、相手になげかけられているのである。

肥後川尻町の、

○オハヨー　アタッ。

お早うね。

阿蘇山南麓で聞いた、

○チョージョ　アタッ。

ありがとうね。

などに見られる「アタッ」は、「アナタ」が「アタッ」になったものであろうか。そうだとすれば、これは、このように形を変えることによって、文末詞化を遂げ、文末詞としての安定を見せたものと言える。ものが文末詞的に用いられはじめると、そのものは、そういう機能の担い手にふさわしく、変形せしめられる。「モシ」が「モーシ」や「ムシ」などにされるようにである。変形はすなわちものの何々化を意味する。

『嶋原半嶋方言の研究』には、

○さいならあた。

○こんにちゃあたー。

などの「アタ」が見える。一つの完全な安定形式がここにあろう。

九州弁の、

○ソギャーン　カイタ。

そうなのかね。

などの「カイタ」ともなれば、「アナタ」「アンタ」は、「カイ」文末詞のもとに「タ」となって熟合しているので、代名詞「あなた」の、文末詞化しての安定形式ぶりはいっそう顕著である。「カイタ」はすでに、一個の完全な複合形文末詞となっている。

○ダレモ　オンナハランダッタロ　ガイタ。

だれもおりなさらなかったろうね、きっと。

の「ガイタ」にしても同然である。ほかに、

○モー　スンデ　シモータ　コツヂャラン　タ。

もうすんでしまったことですよね。

というのもある。九州弁の以上のような文末詞形成は、肥後・豊後その他によく見られる。佐賀弁には、「カイタ」に該当する「カンタ」がおこなわれている。

九州では、「アンタ」そのものは、単独では、文末詞として安定しにくかったようである。他のものと複合して、みずからを、安定形式に持っていった。複合形の製作は、自然の作用ではあるとしても、まことによく、言語の妙理を示すものと思われる。複合か自己変形か、文末詞としての安定方向は二つである。

肥後奥の、

○八時ごろカラ　イカネバ　イクマイ　タ。

八時ごろから行かなくちゃいけないでしょうよ。

の言いかたなどになると、ついに「タ」という単純形を見せるにいたっている。(「アナタ」「アンタ」が「アタ」となれば、「タ」が高音アクセントに発音される傾向の中では、「ア」はいかにも脱落しやすいことである。) この「タ」の語り手は、同時に「カイタ」も言っていた。「カイタ」の習わしは持っていて、「タ」とも言っているところに、文末詞としての「アナタ」「アンタ」のおちつく先が明らかである。また、このような単純な「タ」用法をも背後に持っているがゆえに、「カイタ」などの複合形式の、文末詞らしさ、文末詞としての安定のつよさも明白なのだと言える。

「タ」は一方で、「バイ」にも結合している。九州方言色ゆたかな文末詞「バ

イ」と、九州にいちじるしい「あなた」系文末詞との複合によってできた「バイタ」「バンタ」は、また、九州弁独特のものとなっている。

○シラン　バイタ。

　　知らないわよ。

「私」を言う「バイ」に、相手を呼ぶ「アナ（ン）タ」をむすびつけているのは一奇である。「わたしあなた」！ 不可思議とも言える、こうした結合体であるだけに、できあがったこのものの、文末での孤立性はつねに明らかである。——したがって、このものの、文末詞としての安定度の大であることもすぐに言えるのである。

「タバイ」などとはなっていないことには注意をはらいたい。「バイタ」！けっきょく、「私」系のものだけではすましにくくて、「あなた」系のものをあとへつけた。これで、文末詞と言うべきものの言いかけ性能が、はっきりとしてくる。文末では、どうしても、つよく相手を呼ばないではいられないのである。

> といっても、
>
> ○ナカ　バイ。
>
> 　　ないわ。
>
> などは、「私」系の「バイ」だけで終わっている。これはどう解するか。私はこれを、「私！」と、自己を持ち出して相手に訴えていると見る。「私！」とばかり、相手に言いかけているのである。この言いかけが、けっきょく、相手を呼ぶことになる。一種異様な方式であるけれども、これはこれで、——やや消極的と言えるにもせよ、相手を呼んでいるのである。
>
> 　九州で、「バイ」と「タイ」とは相関的に存在している。それでいて、「タイ」の方がよりさかんに用いられている。「バイ」の領域を犯してもいるくらいである。「タイ」の盛行は、「バイ」の用途の狭隘さをものがたってもいるのではないか。「バイ」は、相手を呼ぶことが特殊的であるため（ありすぎるため）、「タイ」がいっそうよく流布しているのかと察する。

北半九州に、「アンタナー」という文末詞の形式もできている。「あなた」系の要素が前部に出て、あとに「ナ」のくるものである。これも、「アナタ」「アンタ」の、文末詞としての安定の方向だと見られる。（——人は、「アンタ」に「ナ」をつけそえて、「アンタ」に、文末詞としての安定を得させた。）「アン

タナー」から、「タナー」「タナ」が、豊後などで、産まれている。こうなったものは、いよいよ完全な文末詞である。

○……ヂャロー　カタナ。

……だろうかねえ。

などと言っている。豊後に「タナーヨ（ヤ）」もあり、「タナチコ」もある。「チコ」は「ということ」に当たるものか。「チコタナー」の言いかたもある。

「タバイ」の言いかたはなかったが、上のように、「タナ」の言いかたはできている。ここにも一理があろう。「タナ」と、「ナ」を言えば、これは一般的に広く相手に呼びかけることになる。「ナ」に呼びかけ性（←相手への）が顕著である。そのようなものゆえ、「ナ」はしぜんに「タ」の下にも来得たのであろう。「タナチコ」が「チコタナー」とあるのなども、単なる組みかえというよりは、「タナー」と、相手を呼ぶことのはっきりとしたものをあとへ持ってくるいとなみが、そこにあるのだと思う。

さて、「タ」の場合には、「タナ」があって「ナタ」もある。（この形式は、「バイタ」「カイタ」などの形成と同じである。）「ナタ」は、「ナー、アナ（ン）タ」だから、「タナ」よりも、相手を呼ぶ呼びかたがいっそうあざやかだとしてよかろう。「ナタ」とあって、言いかけ・呼びかけの効果が大いにはっきりとする。

「ナタ」は「ナモシ」とも似ていよう。似ていて「ナタ」は、「〜モシ」と呼びかけるのよりも、また、呼びかけが克明である。

九州方言では、「ナタ」に対立するものとして、「ノマイ」（ノー、オマイ）ができている。「オマイ、ノー」形成の文末詞はなくて、「ノー、オマイ」形成のものがある。これらのことからして、複合方式では、ナ行音文末詞が前部にくるものの方が、より安定的なのであろうと見とおすことができる。山口県下だと、のちに記すように、「ノンタ」「ノエタ」「ノータ」がさかんである。これらをも合わせて考えるのに、どちらかといえば、「ナ行音文末詞＋人代名詞系文末詞」の複合方式に、新文末詞形成の、いっそう大きな自在さが認められそうである。（この方式の方が、第一の「安定方式」と考えられるのである。）

「私」を言う「ワイ」「バイ」は、「ナワイ」などとはならないで、（——ナ行

音文末詞との複合はおこさないで)、ひとり、そのままが上者に膠着している。相手を明らかに呼ぶ「アナ（ン）タ」「オマイ」は、しきりにナ行音文末詞を頭につけて、その複合形で上者に膠着している。おもしろい相違である。やはり、相手を呼ぶ料のことば、対称の人代名詞を文末詞として利用することの、文末詞法としての本格さが、こういう複合方式をよりさかんにしているのであろうか。「モシ」の場合も、「ナモシ」などの方式はさかんであって、「モシ」を直接に上者に膠着させることはよわい。

九州の「ナタ」と「ノマイ」とには、きわ立った用法差がある。待遇表現法上の分業がある。文表現が「ナタ」とむすばれれば、この文はていねいな、なにほどかの敬意をこめた表現になる。「ナタ」ではなくて「タ」の場合でも、「ソギャーン　カイ。」はかなりぞんざいな応答であるが、「ソギャーン　カイタ。」となると、これはもはや、下品ではない表現になる。「バイタ」のようなふしぎな複合のことばも、その音感などについて、他地方人がかれこれと感じうるものがあったとしても、土地では、これが、ある品位を持ったことばになっている。要するに、「あなた」の呼びかけのある文表現は、下品にはならない。(——上品とまでは言えないことがあっても。)「ノマイ」は「ナタ」の下に位する。

「ナタ」や「ノマイ」が、今日、特に九州地方にいちじるしいのはなぜであろうか。関連して山口県下に同類のもののあるのは、他の、山口県下に存する連九州の事象の場合と同様に、山口県下の九州性とでも言うべきものを思わせる。山口県を九州に合併して考えれば、「ナタ」「ノンタ」「ノマイ」の類は、全国で、じつに西国にのみ見いだされると言える。思うのに、もとは、西国以外にも、この種のものがあり得たであろう。「あなた」と、相手を呼んで文の表現をむすぼうとする意向、「あなた」呼びかけの発想は、普遍的なことであってよかったはずと考えられる。

九州肥前の「ノマイ」例をあげて、つぎに中国西部の山口県下の事例を見よう。

○ハヤカッタ　ノマイ。

やあ、お早う。（早かったね。）

肥前地方では、「ナタ」と「ノマイ」との相互関係が緊密である。

○ソジャカラ　ホレ　ノンタ。

それだからほらねえ。

○シラヒテ　ツカサイ　ノンタ。

知らせて下さいねえ。

これらは、長門西北岸地方で聞き得たものである。萩市内では、

○ドー　イタシマシテ　ノンタ。

どういたしまして。

などと言う。長門から周防にかけて、「ノンタ」「ノエタ」「ノータ」があり、島嶼部でもこれらがよくおこなわれている。

これよりも東について、一つ注意されるのは、大和十津川方面の「ノーラ」である。

○キョーワ　サムイ　ノーラ。

きょうは寒いなあ。

○まあ、早う来た　ノーラ。

のように、「ノーラ」を対等の者につかっている。じつは大和南部に隣って、紀州路の北にも南にも、「アツイ　ノラ。」などの言いかたが見え、「ノラ」は紀州の有力な一文末詞となっている。十津川では、

○コノ　テガミ　ヨーデ　クレー　ラ。

この手紙を読んでくれよ。

○ハイ　サイナラ。マタ　コー　ライ。

ええ、さようなら。またおいでよ。

とも言う。「ラ」「ライ」が単独に出ている。この「ラ」は何か。紀州路では、

○早う　来い　レー。

のように、「レ」をよくつかう。「レ」と「ラ」とは共通のものであろう。両者の本源として、さしずめ想像されるのは「ワレ」である。紀州に関係の深い淡路や阿波では、「ワレ」文末詞がかなりよく見られる。「ワレ」が「レ」となり「ラ」「ライ」となったか。「ワレ」は、方言上、対称の代名詞として見いだされがちである。が、方言によってはまた、自称の代名詞のことがあるかもしれ

ない。上の「レ」「ラ」の類は、どのように呼びかけたものだろうか。定かでない。かりに「ワレ」とばかり、相手を呼んだものだととるならば、それに「ノ」のかぶさった「ノーラ」「ノラ」は、まさに九州の「ノマイ」と同断のものと見られることになる。たまたま、「ノーラ」が目上へのことばでないことも、九州の「ノマイ」を連想させやすい。

近畿のこのあたりを出はなれると、東には、もはや類縁の形が見いだされないようである。それにしても、"そうです　ネーアナタ。"などと、いわゆる共通語の生活でも、相手を呼んでいるわけであるから、国内のどの方言に、「ノンタ」「ナタ」形式の方言文末詞ができていてもふしぎではない。

一般には、「ナタ」「ノンタ」形式は、今日、特別の地域にばかり残存しているありさまである。あたかも、「ナモシ」類の文末詞が特別の地域に残存するのにすぎなくなっているのと同様にである。

五　感声的文末詞の複合
文末詞の分類体系

以上のように、人代名詞系文末詞の活用ぶりについて、「相手を呼ぶ」文末意識を追求してみると、今や、「ナーヨ」「ノーヤ」などと、感声的文末詞を重複させて相手に呼びかけているのも、じつに、「ナモシ」などと呼びかけるのと同一心意の、相手へのつよい呼びかけであることがわかる。「ナモシ」が、これ自体としては文表現的でもあるのに等しく、「ナーヨ」なども、文表現的でもあるものとして受けとられるのである。

「ナモシ」(ナ・モシ)が、「モシ」と呼びかけていて、そうとうに内容が充実しているのにくらべれば、「ナーヨ」(ナ・ヨ)「ナヤ」(ナ・ヤ)など——感声的文末詞の重複形——は、呼びかけが概括的一般的である。その内容が濃くない。いわばただに感情表出的である。この意味において、私は、「ナーヨ」以下の多くの「感声的文末詞重複形」のものを、人間の言語行動上の文末訴えことば(つまり文末詞)の分類では、「ナモシ」類の前(事前)に置く。(「ナーヨ」などは、「ナモシ」などと等質であってしかも未分化的である。「ナモシ」前と考えられる。)

「ナモシ」類に密着したものは「ナタ」「ノンタ」類である。(——相手を呼

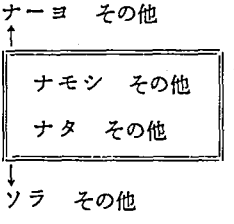
ぶ呼びかたが、これで、克明になっている。)

けっきょくは、「ナモシ」類と「ナタ」「ノンタ」類とが、相手を呼ぶ文末詞として、双璧をなす、と見ることができよう。——両者に、作用性の類似がいちじるしい。この二大群の全文末詞は、ついに、一類型のものとしても見ることができる。

このような、相手指示が本格的である文末詞群の内部にあって、「ナモシ」類と「ナタ」「ノンタ」類との、自然の関連、または移行をものがたるものが、「オイ」「コラ」の類である。つまりこの類のものは、上の両者の中間にある。いわば過渡的存在である。

では、「ナモシ」類「ナタ」「ノンタ」類の大類型の後(事後)に見いだされるものはないか。本格的なものを中心にして、その事前に「ナーヨ」などが見いだされたのに対して、その事後に、なお見いだされるものがあるはずである。それは、後に掲げる「ソラ」以下の、やや不安定な感動詞系(→文系)文末詞の一群である。これらは、その多少の不安定性のゆえに、確たる文末詞群(さきのいわゆる本格的なもの)の後に位置するものと見るのが適当である。

以上をまとめて、ここに文末詞の新分類図を作ってみるならば、下のような体系図が得られる。



六　「ソラ」その他

「ナモシ」類、「ナタ」「ノマイ」類よりも、はるかに、指しかた・呼びかたのおぼめかしいものに、「ソラ」その他がある。

はじめに「**ソラ**」を見る。

薩摩で、

○タノン　下ソラ。

たのむよ。

などと言っている。「ぞ、ソラ」の「ソラ」が、問題とすべき「ソラ」である。このものだけが用いられれば、文表現（「かけごえ」とも言われる。）であろう。そういう特殊簡潔文になりうる要素の「ソラ」（感動詞）が、文末詞化されている。上例では、「そら！」と指し示す気もちはもはやよわく、ただ単に念を押す気もちがあらわされていよう。

○タマスイレッ　ベンキョ　セント　ソラ。

精を出して勉強しないとね。

と、同じく薩摩で言うのでは、押しつける気もちよりもむしろ「さあ」と促す気もちがあらわされている。

日向にも「ソラ」があり、南部で、

○ドヒタッ　カソラ。

どうしたのか。

○ダレモ　オラザッタロガ　ヨソラ。

だれもいなかっただろう。

などと言っている。目上にも、

○ド　シナッタト　カソラ。

どうしなさったのですか。

などと言う。

ソレ

伊予の最南部で、

○コノ　テガミ　ヨンジャンナレ　ソレー。

この手紙を読んで下さいよ。

などと言う時の「ソレー」は、「ソラ」に類するものであろうか。「ソレー」がついて、表現は、したしい仲での、わけへだてのない言いかたになるという。

ソロ

越後北部（下越）、近海の粟生島では、

○行ッテ　キタ　ソロ。（“行ってきた。”）

○大シケダ　ソロ。

○ソダ　ソロ。（“そうだ。”）

などと言っているという。この「ソロ」が、「そうろう」ことばかと言われてもいるらしいが、私は、「ソラ」の類ではないかと思う。この島では、“年寄りたちがさかんにこう言う。”よしである。

ソ

佐伯氏の「信州北部方言語法」（前引）の、

○ソウヨ　ソ。（さうだよ。）

○ダメヨ　ソ。（駄目だよ。）

などの「ソ」は、何に出たものであろうか。

サラ

西に行って山陰地方の「サラ」、

○あんやが悪いさら。　〔鳥取・西伯郡〕

○マメナサラ。（達者で御座います）　〔島根〕

○ワシガカカサンノ弟ダサラ。　〔同〕

（『方言資料抄　助詞篇』による。）

これらの「サラ」は、「ソラ」の類と解してよかろうか。前引書中の、長崎県五島の「サラ」、

○イコアッシャレ　サラ。

の「サラ」はどうか。この、辞去のあいさつことばでの「サラ」は、「さよなら」に関係のあるものかもしれないと、多少は疑ってもみたくなる。当地に、別に「さよなら。」の「サラー。」などがおこなわれている。

ハラ、ラ

さて、南薩の、

○アユ　ミデ　ミヤイ　ハラー。　<p. 44>

あれを見てお見なさいな。

の「ハラー」は、「ソラ」に縁の深い「ホラ」に類するものではないか。同地域の、

○アユ　ミン　ミレ　ラー。

あれを見てみろよ。

○アユ　ミラン　カラー。

あれを見ないかおい。

などと言う「ラー」も、「ハラー」の「ラー」だと考えられる。私はかつてこの種の「ラー」を聞いた時に、何だろうと、受けとりかたに迷った。ことに、「アユミランカラー。」など、「カラー」は何だろうと、ものを受けとりそこねたままで、判断に苦しんだものである。

○センセガ　キタ　ガラ。

先生が来たぞ。

についても、「ガラ」は何でしょうと聞きかえしたものであった。「来たガ」にさらに「ハラー」の「ラ」がついたものであろう。「ハラー」では、「ハ」は脱落しやすいことと思われる。

ハレ

越前海岸、鮎川の、

○ナント　ユータ　ハレ。

何と言ったね。

は、ひとりごとのように「ハレ」が発せられたのであったが、「ホラ」がさらに「ハレ」とも転じうることを示したものではないか。

ホイ、ホン

南紀の尾鷲では、

○コッチャイ　ヨイ　ホイナー。

こっちへ来いよ。

○イクナ　ホイナー。

行くなよ。

○アソッビョラント　ハヨ　イカン　カナーホイナー。

遊んでいないで早く行きませんかねえ。

などと言っている。

信州南部に、「ナムホイ」「ナンホイ」の文末詞があり、三河奥にも同似のものがある。これらでの「ホイ」も、上のと同じ「ホイ」ではないか。

近江、米原や彦根などには、

○コンバンワ　ドッコイモ　イカン　ホン。

今晩はどこへも行かないよ。

というような言いかたがある。上の例は、自分の意志を表示して「ホン」と言っている。米原近在には、

○ドーゾ　タノム　ホンナ。

どうかたのみますよ。

の言いかたもある。「ホン」はどういうものであろうか。単純な感声的なもので、いわば「ホイ」などに近いものではないかとも思われる。

以上に列挙してきたものは、原理上「モシ」的であっても、相手の気の引きかたは、さほどつよくない。(「ナタ」「ノンタ」などの、相手の気を引くことの——つまり呼びかけの——つよさには、比較すべくもないのである。)

つぎの「ヤレ」は、相手の気の引きかたが、ややつよいと言えようか。

ヤレ

信州南部の飯田市などで、

○ホイホイ。チョット　マチナイ　ヤレ。

もしもし。ちょっとお待ちよ。

○マー　アガレー　ヤレ。

まあ上がれよ。

と言う。命令・あつらえ・勧奨の表現に「ヤレ」を言う。「マチヤレ」ならば、「ヤレ」は尊敬法助動詞の一種とされるが、命令形の来たあとにつく「ヤレ」は、そういう助動詞とはしがたい。今はこれも、品詞としては、本来的な感動詞と見ておく。「ヤア」とか「ヤレ」とか、それ自体では現実に文表現的で、しばしば特殊な簡潔文として出現するものが、語としては文末詞化してもいるのだと思う。

この種の「ヤレ」は信州東隣の甲斐でも見られ、西方の伯耆・出雲などでも聞くことができる。

命令形のあとにつくというのではない「ヤレ」なら、越後に、

○行ぐともヤレ。

○ドーショーバたつてドショーバヤレ。(母→娘)

というような「ヤレ」がある。(小林存氏「越後方言の結語法概観」『国語研究』第十巻第七号)ことによると、この「ヤレ」は、「ワレ」の転かもしれない。

いずれにしても、上来列挙のものは、語詞としてのおのおのに、さほど内実がない。その程度の語性のものが、文末詞に活用されている。そこに、独特の文末詞(——相手へのうちかけ・呼びかけのやや漠然とした文末詞)ができているのである。

このようなものは、文末詞の類別においては、前図に表示したとおり、「ナモシ」類「ナタ」「ノンタ」類のあとに置くのが適当である。

○ む す び

国語の日常会話生活では、その本然の要求からして、対話文の文末に、特別の表現法をおこしている。そうして、その中で、しばしば、特に注目すべき結尾表現を見せている。すなわち、語としては文末詞と言えるものをそこに見せている。

あらためて日常対話の生活を考えてみる。「そうです　ネー。」の「ネー」など、ふしぎなことばをよくもひきおこしたものではある。虚心に見つめれば見つめるほど、「ネー」などとは、妙なことばを産んだものだと考えられる。が、さらに考えてみるのに、こうして「ネー」などを用いて、対話の一まとまりを相手にそっくり持ちかけていく話しかたは、対話の「呼びかけ・訴えかけ」表現法として、いかにももっともなくふうだったと思われるのである。対話内容の通達・徹底のためには、この方法はかくべつ有意義であった。

さて対話は、そんなに通じやすいものか。通じやすいものではない。通じやすいものでもことでもなければこそ、人はコミュニケーションの成功を求めて、しきりに訴えことばをなげかける。——人は、よく、対話して、あとすぐ自分で応答してもいるではないか。「へー」とか、「ハイ」とか「ウン」とか、

ひとりがてんの返事を無意識的・機械的に発している。そういう癖の人がある。また、問いの場合にも、“わかったかい？ エー？” などと言っているではないか。訴えかけて理解を得よう、理解の徹底を期そうという気もちはすべての言主にあり、相手が理解してくれることへの待望の念は、すべての言主につよい。

このゆえに、会話生活での念の押しかたは、後退することなくいよいよ発達する。そこで、対話文での文末法のための文末詞はますます繁栄する。個々の文末詞に盛衰隆替はあっても、文末詞をつかう表現生活そのものは、日本語での言語生活の必然として、すこしも衰えることがない。まさに大河の流れにも似た、文末詞利用生活のいきおいがここにある。（「文末詞」そのものを利用しない時も、わずかの文末訴え音を利用し、また、文末の声調<文の抑揚（イントネーション）のかなめの部分>を利用する。）

文末詞の世界は、文法学上から見ても、日本語の文法の沃野である。しかもこれは、いまだなお、さほどに耕されてはいない広野である。ここに多くの研究者が連合してさかんに研究の鍬をうちこむことになれば、日本語の文法研究に関しても、多く広く、新しい業績が積まれることになろう。結果として、日本語に関する文法学がしだいに改新されてくることはもちろん、ひいて、一般の言語の学問への寄与も実際化することが期待される。

中国（シナ）の学徒で、中国語の文末詞<私の言う>に関する研究によって、ソルボンヌから学位を得た人があるという。中国語に関してすら然りである。日本語の、この群生する多様多彩な文末詞を精細に研究して、これを世界の言語学の——ことにその言語科学の座に発表したなら、いったい、どんな反響がおこることだろう。

私自身も、自己の研究作業に大きなまとまりをつけて、これを世に問いたいと思う。

それにしても、まだまだ、実地の調査作業が緊要であることを痛感する。いく十年、この文末詞を全国に追い求めてきたけれども、なお、どこから何が出

てくるかもわからないとの思いにかられる。じっさい、部落がちがえば、もう油断がならないのである。日本も、この場合、多数の部落を含んで広大と言うべく、調査の道はまことに遠い。

加えて、この文末詞というようなものを、どう整理したらよいか、これもつねになやみとなる。まったく目あたらしいものを掘り出せば、まず、ものの認定に迷う。迷いつつよりわける。何もかも苦しみである。——それが大きなたのしみでもあることは言うまでもないけれども。

ここには、文末詞に関するこれまでの私の発表とはややことかわった、異風の発表を試みた。私は、身近な（いな、身の上の）文末詞というものを、人間の日々の表現生活の、平凡かつ深刻な問題としてとらえ、文末詞を、人間言語の核心的事実として見つめようとしている。また、このような態度で、私は、旧来の言語学に、「人間言語の学」であってもらいたいと、要望しようとしてもいる。

「文末詞」が上来のように観測されることから、当然おこされてくるべき教育論、文末詞生活に関しての教育問題については、今はいっさいふれないことにする。

（昭和46年8月23日了）

筆者既稿、文末詞研究文献

1 『日本語方言文法の研究』 岩波書店 昭和24年
2 「筑後柳河ことばの『メス』と『ノモ』」『近畿方言』15 昭和27年9月
3 「日本語表現法の文末助詞 —その存立と生成—」『国語学』第十一輯 昭和28年1月
4 東条 操編『日本方言学』の「文法篇」 吉川弘文館 昭和28年
5 『日本方言地図』の「文末助詞『ナモシ』類その他の分布図」吉川弘文館 昭和31年
6 「対話の文末の『よびかけことば』 ——ナモシ類その他について——」『広大文学部紀要』 昭和31年3月
7 「方言文末助詞（文末詞）の研究について」『方言研究年報』第一巻 昭和32年12月
8 「日本語文法の記述体系」『国文学攷』第二十三号 昭和35年5月
9 「Cessationals in the Japanese Dialects」『Monumenta Nipponica』VOL. XIX NOS. 1—2 1964
10 「瀬戸内海域の文末詞『ナー』『ノー』」『方言研究年報』第八巻 昭和41年3月
11 「"山形弁" と "宮城弁"」『国語学』70 昭和42年9月
12 「東北方言『文末詞』の一研究」『方言研究年報』第十巻 昭和42年9月
13 「Word-Geography of Japanese」『Zeitschrift für Mundartforschung』 1968
14 『日本語方言文法の世界』 塙書房 昭和44年

A Study of the Sentence-Closing Particles in Japanese Dialects

Yoichi FUJIWARA

In the spoken sentences of modern Japanese dialects, some particular element is frequently attached to their ends. This element serves to call the attention of and make an appeal to the hearer; in other words, it is an emotional component of a sentence. This additional element may reasonably be called at the level of accidence a sentence-closing particle. It is easy to find that this part of speech is unique in the structure of a sentence. The sentence-closing particle makes more conspicuous than anything else the difference between the sentence structure of modern western languages and those of Japanese dialects.

The present author, who makes it his aim to establish linguistics for the Japanese language, has been engaged in the study of sentence-closing particles. In one of his books, *A Dialect Grammar of Japanese* (Sophia University Press. Tokyo, 1965.), he named these particles 'cessationals' for want of a better term, but he now does not think it quite appropriate. The fact is that a sentence-closing particle is a special type of appealing word standing at the close of a sentence and conveying to the hearer its ultimate expressive value.

It is also distinct from the tag in the English question "It is fine today, *isn't it*?", because in English we not only put the sentence in interrogative form but also place a slight pause or a comma immediately before the tag. A sentence-closing particle in Japanese is, on the other hand, the concluding part of a sentence structure without any such intervening element, as in "Kyō wa ii tenki desu *nā*".

In many dialects of present-day Japanese, a vast number of words are employed as sentence-closing particles. It is such a striking feature alien to any other modern languages that it deserves attention as a remarkable phenomenon of man's linguistic life. Human instinct to clearly communicate one's mind has led to the device of appealing to the hearer by means of sentence-closing particles. No doubt this is a good subject for linguistics, the science which is devoted to the study of human speech.

The present essay is intended to arouse a greater interest in and the awareness of the significance of sentence-closing particles. It is divided as follows.

Introduction

I. Survey of Sentence-Closing Particles

We have made a most extensive observation of emotional components at the end of a sentence, and discussed about the making and function of what we call sentence-closing particles.

II. Classified List of Sentence-Closing Particles in Japanese Dialects

III. On Final Appealing Phonemes

We can sometimes recognize some phonetic element which is a near equivalent of, but no so complete as to be regarded as, a sentence-closing particle. A brief description has been given of the final appealing phoneme [a].

IV. On Sentence-Closing Particles Transferred from Interjections

There is a class of sentence-closing particles converted from interjections. Examining their function and emotional effects in a sentence, we have shown the spontaneity and necessity of appealing in conversation.

Conclusion